

REVIATHAN

~S o d a l i s~



8月X日

喪くしてから気付いた
つまらない大切な日々

いつもどおり気怠い，午後最初の授業。

「...の記述を通して絶対王政を支持したのに対し...」

眠い...

昼休み明けはいつもこうだ。

授業には何の興味もない。

でも，必修だし，出席にうるさいし，いつも出るには出てても座って過ごしているだけ。

「...を発表することで，民衆には抵抗権が...」

「...」

黒板の上にある時計を見る。

授業が終わるまで，まだあと10分以上ある。

「...」

右に視線を逸らして，窓の外を見るとトラックを走る人達の姿があった。

一番暑い時間だというのに大変だ。座ってボーっとできるだけ，体育の授業より楽なのだろう

。

「...」

窓と反対側に視線を動かすと，同じように気の抜けた様子の顔がいくつも目に入ってきた。

首がガクンと傾いてハツとする人さえいる。

顔を真っ直ぐに戻して，黒板を見るようにしながら，実はどこも見ないようにしていたら，また意識が飛び飛びになっていく。

眠い...

「！」

覚めると同時に瞼が開く。

遠くに白っぽく薄ぼんやりとした壁みたいのものが見える。

ここは...

一瞬混乱し，すぐに気付く。

昨日眠る前に見たのと同じ，コンクリートの天井だ。

気怠い授業という何でもない日常だったものは，夢。

毎日コンクリートの天井を眺めて眠るという異常が、現実。

今は明け方前くらい？

でも時計は見ない。どうせ朝が来たって、平凡な日は始まったりしない。

もう何人がいなくなっただろう...

一度開いた瞼をもう一度閉じる。

そして冀う。

せめて夢でまた、あんなつまらない日に...

8月1日

目が覚めた時

日常が終わる

踏切のように、ものすごい音で急に目が覚めた。

「...」

(なに?)

(椅子に座ってる?)

(ここ、教室じゃない?)

(机で寝てたの?)

乗ってたはずの電車の中じゃない...

大きな音は、まだまだ止まない。

周りを見る。

いるのは同じクラスの人達。

みんな私と同じで、急に叩き起こされて何が何だか分からない顔。

みんな私と同じで、周りを見回してる。

「自然状態研究所へようこそ」

(!)

突然声がしたと思ったら、前の壁に嵌め込まれた大きなテレビに青一色の画面が写ってる。

でも、声はテレビじゃなく上から聞こえてきたみたいだ。

「机の中に各自が使用する携帯端末を配付しましたので、確認しなさい」

(え?)

思わず声のとおり、机の中に手を入れると何かあったので、出してみたらピンク色の機械だった。

「各自、携帯端末の裏面のオンオフとある部分を押しなさい」

(オン、オフ?)

言われるまま『ON/OFF』と書いてあるところを親指で押す。

小さくピーツという音がして、画面が明るくなる。

「指紋と使用者を照合しました。今後携帯端末を使用する場合は指紋認証が必要です」

(は?)

確かに画面には私の名前が映し出されてる。

「各自の机横にマニュアルを用意しました。この施設の利用や携帯端末の詳しい使用方法についてはマニュアルを読みなさい」

「...」

今やっと判ったけど、みんなの席順は出席番号順。

前の席の藍川くんは声のとおりマニュアルを机の横のフックから取ってめくり始めたけど、私は自分の名前だけ映った端末の画面をまた見た。

「自然法により、国民は一人の国王に自然権の行使を委ね、その臣民となりました」

突然、今度は青一色だったテレビの画面に字幕が映し出される。

声は字幕を読み上げてるようだ。

「国王は法を制定して国家を統治し、臣民は議会を開き自治を行います」

「それでは自然法を伝えます」

「国家は国王と臣民で構成され、国王は不可侵とする」

始まってしまうと、字幕も表示されながら、声が流れるように読み上げてく。

「日々選挙し、前日と異なる者を国王に選出する」

「国王が任期の間過去の法に矛盾しない限り制定する法は一本を超えてはならない」

「法は臣民に適用され、法に違反した者は排除される」

頭には何も残らない。

どこかお店で流れてるような音楽と同じだ。

「法の違反は臣民の告発でのみ確定する」

「臣民の議会に法以外の事項を提案した者については、否決をもって排除される」

「最初に法の違反があった日から三十日以内に人口を一にする」

「以上です」

「自然法については携帯端末で検索し表示することができます」

「...」

頭は混乱したままだ。

何が何だか全然解らない。

次々声が聞こえてきて、何か考えてる暇がない。

それなのに状況はどんどん変わってく。

一瞬何かが途切れてからまたつなぎ直すような音がして

「2年4組の出欠をとります」

相変わらず、唐突な声。

数秒して

「藍川優秀(あいかわまさひで)」

「はい」

当然出席番号1番から始まった。

「安齊美結(あんさいみゆ)」

「はい」

藍川くんのように、はっきりとは返事できなかったけど、一応声は出た。

「一ノ木梨加子(いちのきりかこ)」

「...」

「一ノ木梨加子」

一ノ木さんの返事が私には聞こえてたけど、出席を取ってる何かには聞こえなかったみたいで、もう一度呼ばれた。

「っ、はい」

「内海芳毅(うちうみよしき)」

「はい」

「鹿生健蔵(かのうけんぞう)」

「はい」

さすが健ちゃん、こんなときでも声は大きい。

「工藤満(くどうみつる)」

「はい」

「榮川シュテフアーニエ栗那(さかえがわしゅてふぁーにえかんな)」

「はい」

「佐藤英昭(さとうひであき)」

「はい」

「猪戸あかり(ししどあかり)」

「はい」

「鈴木まな恵(すずきまなえ)」

「はい」

「鈴木みな恵(すずきみなえ)」

「はい」

「曾根嶋茉莉亜(そねじままりあ)」

「っ、は、はいっ」

私もそうだったけど、曾根嶋さんも声は出にくかったようだ。

「田月信之輔(たづきしんのすけ)」

「はい」

「千賀理璃(ちがりりい)」

「はい」

「戸田龍太(とだりゅうた)」

「はい」

「中岡大翔(なかおかひろと)」

「はい」

「仁藤英基(にとうひでき)」

「はい」

(ヒデくんも返事がはっきりしててスゴいなあ...)

「根津優香(ねづゆうか)」

「はい」

「野村光(のむらこう)」

「はい」

「長谷田雄生(はせだゆうせい)」

「はい」

「舟山涼香(ふなやますずか)」

「...い」

「舟山涼香」

「っ、はい」

元々声が小さめの舟山さんは、こんなときの返事は余計に大変かも...

「星佑太郎(ほしゆうたろう)」

「はい」

「前田美紗(まえだみさ)」

「はい」

「三浦克哉(みうらかつや)」

「はい」

「三田珠美佳(みたすみか)」

「はい」

「村井麟汰(むらいりんた)」

「はい」

「森愛麗沙(もりありさ)」

「はあ〜い」

(こんなときにこの返事...)

森さんって別な意味でスゴイ...

「矢口広魅(やぐちひろみ)」

「はい」

「柚島美愛(ゆずしまみあ)」

「はい」

「綿谷爽輔(わたやそうすけ)」

「はい」

最後の綿谷くんまで点呼が終わった。

「2年4組、全員出席確認できました」

また切り替えの音みたいなのがして

「終了します」

という言葉で画面がまた青一色に戻った。

(！)

突然一斉にまた踏切みたいな警報音が鳴った。

何人かが反射的に机の上の端末を掴む。

私も端末を持ち上げると、画面には『メールが届きました』とあって、メールマークが点滅してた。

(.....)

メールマークに指で触ると、画面が切り替わって、受信メールの一覧が。

1件だけ来ている“@国王選挙”に触ると、メールは開いて

～今から本日の国王選挙を開始し、30分以内に国王名を送信せよ～

とだけ書いてある。

「え？」

あまりにも急で一方的なメールの内容に驚いてしまう。

みんな私と同じ感覚だったようで、ちょっと左を向くと隣の佐藤くんも強張った顔をしてる。

それにしても、今すぐ選挙しろと言われても、やり方も決まってないし、どうやれば...

「みんな」

その時、途方に暮れそうだった私の目の前で藍川くんが立った。

藍川くんは身体ごと後ろに向きを変えて

「呆然としてても仕方ない。やることをやらないと」

と言いながら前の方へ歩いて行く。

「国王選挙とやらをしなければいけないみたいだから、普通の選挙のようにまずは立候補をしたい人がいるかどうか知りたい」

そう言って、軽く顔を左右に振って部屋全体を見回す藍川くん。

「...立候補はないということか」

藍川くんはちょっと首をひねって

「そうすると、くじ引きとかで決めるのか？」

みんなに訊ねるようにしてから

「分かった。やりたくないのは俺も同じだけど、誰か国王にならないといけないなら、出席番号も最初だし今日は取りあえず俺がやってもいい」

と言って、またみんなを見回す。

「...藍川では駄目だという意見もないようなので、俺でいいという人は拍手でもしてくれ」

物音一つしない中、藍川くんの声の余韻が響いているような状態が数秒続いた。

左の方からパチパチと音がしたので、そっちを見ると、森さんだった。

「誰かに決まないとヤバイんだろーし、藍川でいいんじゃないのー」

私と同じように10数人が森さんを見てて、森さんのその一言で、パラパラと拍手は増えていった。

「...じゃ、みんなの承認ももらえたという感じなので、今日は俺が国王をやります」
藍川くんが言うと、またパラパラと拍手が起こった。

「国王の名前を送信するという事なので、田月さんと野村さんに立ち会ってもらいたいんだけど」

「...」

「...」

藍川くんが目の前に座ってる田月さんと野村さんに声を掛けると、二人は無言で立って藍川くんの左右に移動した。

藍川くんが端末を操作して、それを二人が見ている状態が数分続いてけど
「！」

またさっきの警報音。

端末のメールマークに触ると“@国王選出”“@法の制定”というメールが一度に2通届いてた。

8月1日 @国王選出
～藍川優秀を国王に選出～

8月1日 @法の制定
～国王藍川優秀は法を制定し、本日中午に内容を送信せよ～

「そうか、法も決めないといけないんだったな」
みんなと同じく端末に目を落としていた藍川くんが顔を上げて
「とにかく全員で協力し合うことが一番大事だから、1日1回は必ず午後7時にここに集まって話し合うことにしよう」

と言うと、今度はすぐに拍手が起きた。

「ちょっと勝手だけど、この部屋は集会室って名前にするから、いいよな？」
別に拍手はなかったけど、誰からも反対がなさそうなのは間違いなかった。

「今決めたのを送信するので、そのまままた二人をお願いします」

「...」

「...」

田月さんと野村くんが端末を覗き込む真ん中で藍川くんが端末を操作した。

数分してまた警報音が鳴ったので見ると、“@国王の法”というメールが届いている。

8月1日 @国王の法
～今日の法は【全員午後7時に集会室に集まる】です。 藍川～

「やらないといけないことは全部終わったようだけど」
自分でも端末の確認をした藍川くんがみんなを見回す。
「このあとはどうする？」

どうすると訊かれても私には勿論分からない。

「ずっとここにいても仕方ない。マニュアルとかいうのもあるけど、まずは、暗くなる前にこの建物の外がどうなってるか調べないか？」

左から声がしたのでチラッと視線を向けると、長谷田くんのようにだった。

「そうだな」

相槌を打ったのは、声からしてたぶんヒデくん。

「外を調べるってことで、みんないいか？」

「こんなところにずっといれないでしょ？」

訊き返すような森さんの言葉。

「ここの外を調べるというのに誰も反対しないようだけど、行きたくない人は行かなくていいと思うから、今は3時ちょっと過ぎだけど一旦解散、少し余裕をもって7時10分前にはここ集合ということにしよう」

藍川くんが言うと、すぐに長谷田くんが立ち上がった。

「自分で言い出したんだから、俺は外に行く。できれば俺以外も外に出てくれ」

「俺も行く」

次に立ったのはヒデくん。

「こういうのには俺も行かないとな」

後ろから声がしたけど、この声からすれば健ちゃんだ。

健ちゃんが立つと、男子は席を立て、出入り口の方へ向かった。

「行ってらっしゃーい、気を付けて頑張ってねー」

森さんだ。

「他にも部屋はあるんだろうし、うちらは中を見してみるからねえー」

森さんの言葉に何だかちょっとホッとする。

外に何があるか全然判らないのに出るのはスゴク怖いけど、みんながみんな外を見に行かなくても、建物の中を調べるのも大事かもしれないし、それなら私にもできそうだ。

結局男子は全員部屋から出て行って、中に残ったのは全員女子。

(.....)

森さんの言うとおり私達も建物の中を調べに行かないと、と思ったその時

「安齊さん」

前から声を掛けられた。

「え？」

私を呼んだのは榮川さんだった。

「っと、どうしたの？」

「私と調べに行こう」

「え、うん」

「一ノ木さんも一緒に行こう」

「あ...」

榮川さんからすれば、私はすぐ右斜め後ろで一ノ木さんは私の後ろだから、一番近い席の私達に声を掛けてくれたんだろう。

見ると、猪戸さんと曾根嶋さんと双子の鈴木さん達4人もグループを組んでた。

「じゃあ、榮川さん、一緒に行こう」

「うん」

「一ノ木さんも行こう？」

「.....」

声は出せずに頷くだけの一ノ木さん。

「何か持つならバッグから出して」

「え？」

榮川さんが指で差すところ、私の椅子の下に私が家から持ってきたバッグが入っていた。

「...」

バッグを開けてみると私が入れたとおりに入れた物が入っているけど、何を持って行けばいいかなんて全然分からない。

「別にないみたい」

「...」

一ノ木さんも同じみたいで、首を横に振った。

私達3人は森さん、矢口さん、美愛、三田さんグループに続いて廊下に出た。

グループは前田さん、舟山さん、根津さん、千賀さんのグループもあって、4つだ。

4つのグループは最初一緒だったけど、廊下が分かれるたびに4つが2つずつに分かれ、2つが1つずつに分かれた。

榮川さん、一ノ木さんと3人きりになってしまうと、なんか緊張してしまう。

普段、一ノ木さんとほとんど話をしたことはなかったけど、一ノ木さんは物静かな人だから、私のように口数の多いタイプでない舟山さんや曾根嶋さんなんかと話が合うようで、それが判ってることもあって決心しなければ話し掛けられない感じじゃない。

でも、榮川さんとは会話の糸口が見付けられない。

榮川さんの名前は『シュテファーニエ栗那』。

背が男子とあまり変わらないように見えるから、きっと170cmより高いんだろうし、肌がホント真っ白で、髪も眉も全部金髪で、瞳は青で、顔だちもヨーロッパ系の人にはしか見えない。

授業中に教科書を読むとか、何か答えるとか、そういうときに話すのを聞いたことはあるけど、私達と何も変わらない感じで別に日本語が不自由ってわけでもないみたいだから、話し掛けるのに言葉の心配があるんじゃない。

学校にいる間、誰ともしゃべらない榮川さんについては、私に限ったことじゃなく、誰も何も知らない感じなので、話題がないというか、決心して話し掛けても話が弾むとは思えない。

最初いた部屋を出てすぐの廊下で、前田さんが、途中で見付けた物をメモしておくよう言っ
て紙とペンを渡してくれたので、言われたとおりに目に入ったことを書き留めながら、誰も一言もしゃべらずに、ただ歩いた。

「？」

でも、ふと目に入ったのは、榮川さんが地図も描いている様子だった。

「そっか、地図も描いた方がいいのか」

スゴク感心したので、独り言のように呟いてしまったのだけど

「これは配置図」

榮川さんには聞こえていたようだ。

「うん...そうだね」

なんかピシャッと窓を閉められてしまったような感じに似てて、ちょっと怖かった。

「できれば二人も」

「え？」

ところが榮川さんは私との話を締め切ったわけではなかったようで

「配置図を作って」

と言った。

「あ、うん」

私が頷くと、傍で一ノ木さんも頷いた。

「別々に作ると見落としが減るから」

「あ、そうなんだ」

メモしてと言って紙とペンをくれた前田さんもそうだけど、榮川さんも冷静な人なのだった。

私は前田さんに渡されたものを使ってるけど、榮川さんは自分でノートを持ってきたようで、これも持ってきたのだろう、机の横にかけてあったマニュアルを時々開いて見たりしながら、熱心にノートを書いている。

テキパキとやるべきことを進めてくれた藍川くんといい、何となくみんなの足を前に向けさせた森さんといい、こんな訳の分からないことに巻き込まれてながら、しっかりした人達がうちのクラスにはいてくれたようだ。

「それにしても随分広い建物だね」

「...」

「...」

「部屋はいっぱいあるけど、中身は空っぽだね」

「...」

「...」

私ばかりがしゃべって、榮川さんも一ノ木さんも黙ったままだ。

でも、普段からこの二人はしゃべらないし、私は逆に授業中とかでなければ、しゃべらない時間の方が少ない。

しゃべり続けてれば、私はいつもの感じでいれる気がするし、できるだけいつもどおりの空気を作るためには、それでいいのかもしれない。

榮川さんと一ノ木さんと三人で行き止まりにあった部屋を調べた。

調べ終わると元来た道を引き返すしかないわけだけど、部屋を出たところで、廊下を曲がってきた前田さんが見えた。

「あ、前田さん」

「安齊さん」

「こっちはもう行き止まりだから戻るしかないよ」

前田さんに言うと、前田さんの後ろから根津さんと千賀さんが来て

「こっち側も見たの？」

と千賀さんに訊かれたので

「うん、私達そっちから回ってきたから」

と答えると

「そうなんだ」

「じゃ、建物の中は多分全部見たのかな」

千賀さんと根津さんが言ってから

「私達、安齊さん達3人以外の全員とも行き当たったから、そのようだね」

前田さんが言った。

「もう見る所がないなら、最初の部屋に帰ろうか」

「そうだね。うちら以外はみんな帰ってるだろうし」

前田さんと根津さんが言うので

「私達も戻る？」

振り返って榮川さんと一ノ木さんに訊くと、二人とも頷いた。

最初いた部屋に戻ると、ほかの2グループはもう部屋にいた。

みんなが調べてきたことを合せると、この建物の中には体育館やシャワー室、食堂とか図書室とか保健室みたいな部屋まであって、服がいっぱい置いてある部屋や洗濯機のある部屋も見付け

たらしい。

私達はカーペットの敷いてある少し小さめの部屋を3つ見つけたけど、同じような部屋はあと2つあったようだ。

私達が調べた部屋は、どこも鍵なんてかけてなかったのに、森さん達が見付けた食堂の隣にある部屋2つには鍵がかかっていて入れなかったようだ。

それに、森さん達が食堂を調べてたら、自分の端末をタッチするところがあって、タッチすると30くらいもあるメニューの中から好きなものを選んで、料理が機械から出てくるのが判ったらしい。

そんなスゴイ部屋もあったみたいだけど、私達が実際に見たほとんどの部屋は何一つないがらんどろで、倉庫って感じの部屋のいくつかには掃除用具とかペンキとかカラスプレーなんてものだけあって、保健室みたいな部屋なのにベッドなんてなかったりしてた。

調べたらかえって分からないことばかりになってしまった感じ。

私達が戻ってきて少しすると、男子達がみんな帰ってきた。

「どうなったの？」

ヒデくんに訊いてみる。

「んー...」

ちょっと困ったような顔をする。

「この建物以外の場所はほとんど行けないみたいだ」

「え？なに、それ？」

ヒデくんの言うことの意味が全然分からない。

「この建物から3分くらい行くと崖で、下は海になってるんだ」

「海？崖？」

訊き返す。

ヒデくんが小さく頷いて

「東と南は海で、北と西は3分くらい行ったところが10mよりも高いコンクリートの壁が立ってるし、遠くは壁より高い森になってて見えない」

と言うので

「ええ...」

気の抜けたような返事しかできない。

「建物の周りは野原しかないしな」

健ちゃんが言うけど

「...」

もう何も言葉が出ない。

ヒデくんや長谷田くんが前田さんや千賀さんと話してるのを眺める。

「どうしたの，ボーッとしちゃって？」

声の方を見たら美愛だった。

「うん，何だか訳分かんなくて」

「そうだよな」

美愛は私の向かいに座った。

「何なの，一体って思うよ，あたしも」

「うん...」

「だいたい，ここってどこ？」

「うん...」

二人で顔を見合わせる。

美愛とは中学校以来の友達だ。

健ちゃんとヒデくんが小学校から一緒だけど，女子だとやっぱり美愛と一番気が合う。

「まず，ご飯に行こっか？」

「え？」

「何かさ，５時半からは食堂？の機械動くみたいで，もう行っちゃってる人もいるよ」

「は一...」

ちょっとビックリするし，笑ってしまいそうになる。

私はさっきから何も考えれないし，お腹も別に空かない。

前田さんとか榮川さんみたいなしっかり者はいたけど，こんなところがしっかりした人もいたんだ。

「ホントに出てくるのか試してみたいじゃない」

「うん」

少しだけ口の端が上がったと自分でも判った。

（美愛の明るさにはいつも助けてもらってるなあ）

食堂に行ってみると

「健ちゃん？」

もう食べ始めてたのは健ちゃんと野村くんと田月くんの３人だった。

「やっぱりなあ」

「お，何だ，美結。もう来たのか？」

「もう来たのかって，先に来てたのは健ちゃんの方だよ」

「おお」

右手を上げて応える健ちゃん。

隣で美愛が笑ってる声が聞こえるけど，たぶん私も笑ってるはずだ。

「こんなとき誰が食べに行ったのかと思ったら，やっぱり健ちゃんだ」

ただ、隅っこの方では森さんと三田さんと矢口さんの3人も食べてるようだった。

美愛も私もオムライスを選んでテーブルに戻る。

「スゴイねえ、どーゆー仕掛けになってるんだろ」

「裏で何かになってるみたいだよ」

「うん」

説明書きどおりにしてメニューを選んでみたら、ちゃんとベルトに乗って出てきたのだ。

「...」

健ちゃん達から2つ離れた席に美愛と向い合せに座ったら、いつのまにか隣に榮川さんが来ていた。

「...隣に座ってもいい？」

「いいよ」

「...」

トレイをテーブルに置いてから私と健ちゃんの間席に座った。

「榮川さんのは何？」

「野菜天ぷらと白飯と味噌汁...」

「そっかあ」

一応私の問い掛けに答えてくれたけど、何となく空気が固かったので、それ以上はやめた。

「味はまあまあ食べれるくらいだね」

「うん」

美愛の言葉でちょっと笑ってしまった。

「あんなベルトに乗って出てくるんだし、絶対裏で冷凍かなんかをチンしてるんだよ」

「そうかも」

1分くらいで出てきたし、美愛じゃないけど自販機みたいな仕組みなんだろう。

私と美愛が食べ終わった頃には、大体の人達がご飯食べに来ているようだった。

食べ終わって、そのまま最初の部屋に行く。

「お、美結も来たのか」

部屋に入るとヒデくんが手を上げてくれてるし、隣に健ちゃんもいて同じようにしてる。

「もうご飯は食べたの？」

「俺は早食いだからな」

「そうだね」

笑いながら頷く。

「あれ？さっきの席じゃなくていいの？」

美愛がヒデくんに言った。

健ちゃん達が座ってるのは右から4列目の一番後ろ。

健ちゃんが後ろ、ヒデくんが前の席に座ってて、もちろん最初の席とは違う。

「別にいいんじゃないか」

「ああ」

「そっか」

美愛はヒデくんの右隣の席で椅子を引いて

「あたし、こっちにするから、美結はそこにしなよ。早い者勝ちだよ」

私に健ちゃんの右隣の席を勧める。

「うん」

美愛に言われたまま座った。

ふと見たら、最初は私の斜め前、右から2列目の一番前に座ってた榮川さんが、いつのまにか1列目の一番後ろに座ってた。

藍川くんが言ってた7時10分前。

ほとんど全部の席に誰かが座ってるけど、でも2つ空いてる。

「誰だろ？」

「んー...」

ヒデくんは部屋をグルッと見回した。

「佐藤と根津のようだな」

「そうなんだ、大丈夫かな」

美愛が言う。

「大丈夫って？」

「7時にはここにいなきやいけないんでしょ？だから」

「ああ」

(そうだよね)

法律とかっていうのを守らなかったらどうになってしまうのかは分からない。

(分からないけど、何だか分からなくても守った方がいいよね)

フワフワとした訳の分からない怖い感じがするんだ。

7時2分前。

「ちょっと、佐藤と根津は何やってるんだ！」

長谷田くんがイラついたように言う。

「7時にいなかったら、どうなるの」

「やっぱり何かになっちゃうのかな」

私と健ちゃんの前に座ってる双子の鈴木さん達がポソポソと話してる。

「探しに行くとかしたくても、7時になるまでここから出れないぞ」

「そうだな」

隣は田月さんと村井さんだ。

7時になった。

2人は来ない。

シーンと静まり返ってる部屋で12を指してた時計の針がカチッと動く音がした。

「みんな！」

長谷田さんが前に走り出た。

「根津と佐藤を探しに行くぞ。男子も女子もさっき調べに行ったときと同じグループになって、手分けして行こう」

「...」

「...」

無言で健ちゃんとヒデくんが立ち上がって、野村さんと工藤さんの肩を叩いた。

そして部屋の外に走っていくのを見てたら、私の隣に人影が。

「安齊さん、行こう」

榮川さんと、一ノ木さんが立ってる。

「う、うん」

「あたしも行くよ」

美愛だ。

「うん」

さっき調べに行ったときのグループに美愛は入ってないけど

(今一緒なんだし、一緒に行ってもいいよね)

「...」

榮川さんは早足でドアに向かって歩き始めたので

「美愛、一ノ木さん、行こう」

慌てて3人で榮川さんに付いていく。

8時過ぎ。

集会室でぼんやりしてしまってた。

集会室には全員がいるわけじゃない。

それに、全員揃うことはない。

根津さんも佐藤くんも死んでたらしいから。

根津さんは外で、佐藤くんは建物の奥の方の部屋の中で、ヒデくんは美結は見に行くと言われたし、実際見てきた健ちゃんから聞いた話だけだけど、二人とも身体が千切れたみたいにして

死んでたようだった。

(身体が千切れるって...)

見てなんかいないから、考えてるだけだ。

息が止まるくらいお腹が締め付けられるようだ。

苦しい。

フワフワしてた怖い感じは、もうズッシリ重い恐怖だった。

思う。

(こんなことが本当じゃない)

頭を振る。

(でも、健ちゃんとヒデくんがこんな嘘ついても...)

胸の辺りを押さえる。

(なに、これ...)

建物の中を調べた最後に根津さんと会って、話もした。

その根津さんが...

「美結」

「...」

「美結」

「...」

「おい、美結！」

(！)

「え？」

肩を揺さぶられたから、ヒデくんを見る。

「...なに？」

「なにして、美結も気を付けろよ」

ヒデくんらしくないイライラ感。

「え？気を付けるって？」

ヒデくんのイライラが何か全然解らない。

「美結はショックで聞こえてなかったんだよ」

美愛が言うと

「はあー...」

ヒデくんが腰に手を当てて溜め息をついた。

「今度は美結、ちゃんと聞けよ」

無言で頷く。

「法を守らないと排除されるのが本当だから、排除ってのは死ぬってことなんだ」

「うん...」

「だから、とにかく法を守ることだけは絶対気を付けろよ」

「うん...」

今度はヒデくんの言葉が何とか頭に引っ掛かったので

(法律は守んなきゃ)

とだけは思った。

「それにしても...」

ヒデくんが腕組みをする。

「なに？まだ何かあるの？」

重すぎる恐さに潰れちゃいそうなのに、でも訊いてしまう。

「誰が告発したんだろうと思ってな」

「え？」

やっぱりまたヒデくんの言いたいことは全然解らない。

「ゴメン，解らないよ...」

「ああ，俺こそ，言葉が足なくてゴメン」

ヒデくんは腕を解いた。

「佐藤とか根津が，7時に集会室にいるって法を守らなかったとはいっても，誰かが告発しなければ違反にはならないはずなんだ」

「え...」

「今端末で確かめてみてもそうなの」

「うん...」

「佐藤と根津を探すために，俺達はグループで行動したろ？」

「うん...」

「告発のとき端末に向かって話さなきゃいけないみたいだから，誰にも聞かれないで告発するのは多分無理だ」

「うん...」

「佐藤や根津を監禁した奴と告発した奴は同じだろうし，しかも一人じゃなくてグループだってことだよ」

「うん...」

「どうしてだ，英基？」

気の抜けた返事しかできない私に代わって，健ちゃんが訊いてくれた。

「いいか，健蔵。誰にも聞こえないようにできないってことは，聞かれてもいいように告発したってことだ」

「だから？」

「だから，佐藤や根津を告発した奴等は告発することで意見が一致したってことだ」

「そうなのか？」

「...」

健ちゃんは不思議そうにしていたけど、私にはやっとヒデくんの言いたいことが理解できた。

「もう足のすくい合いが始まったんだよ、健蔵」

「あ、ああ」

「こんなことはこれからいくらでも起きるぞ。俺達も絶対やられないようにしないと」

「...」

それまで何とか立っていれた私だったけど、ヒデくんの言葉が終わるとしやがみ込んだ。

「美結，大丈夫か？」

「うん...大丈夫」

視線は床に向いたまま健ちゃんに答える。

ヒデくんの言うとおり，一人一人がお互いに誰かを，グループの違う人達を，それぞれ敵だと思い始めたら，どうなっちゃうだろう。

頭の中がぼっかり空洞か真っ白になり，涙も声も出ない。

(こんなの夢なんじゃないの？)

でも，なんか解った。

この夢は終わらない。

死ぬまで...

裁きに因る死亡者

佐藤英昭

根津優香

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

28人

8月2日

夜が明けないでと思った
でもやっぱり朝になった

薄明かりが差し始めた部屋。

「……」

時計を見ると、4時49分。

さっき見たときは4時31分だった。

結局眠れないまま朝になってしまうようだ。

昨日は、佐藤さんと根津さんがあんなことになってから、全員が集会室に集まって話し合った。

夜はカーペットが敷いてあって床が固くない4部屋に分かれて過ごすことになり、私達はこの部屋で寝ることにしたのだった。

(……)

上半身を起こして部屋の中を見回すと、ホントに眠ってる人もいるけど、ああいう人は心が強いのだろうか？

それとも鈍いだけ？

「茉莉亜」

「え？」

そっと声を掛けてきたのは、隣で横になっていた理璃だった。

「ゴメン、理璃。起こした？」

「いや、ウトウトしたときもあったけど、ほとんど寝てないから」

「そう、理璃も…」

あたしは理璃が明るい性格だと思ってたし、今まで悩んだりしているのを見たことがなかったけど、そんな理璃でもやっぱりスゴク昨日あったいろいろなことがストレスだったのだ。

「なんかちょっとだけ安心した」

本音がポロツと口に出たら

「え？なんでー」

ほんの少し理璃の口元がほころんだ。

「これからどうなるの…」

「うん…」

理璃は起き上がってあたしの横に来た。

「みんなでちゃんとまとまって、昨日みたいなことがもう起きないように頑張るしかないのかな…」

あたしが呟いても

「…」

理璃は何も答えてくれない。

（分かってる）

それ以上あたしも言葉にはしない。

天井を眺める。

（今の質問に答えれる人はいるの...）

何度も溜め息をつく。

（みんな集まれば、いい考えが浮かんだりするの...）

「おはよう」

（！）

トイレに行った帰りに、いきなり後ろから声を掛けられたのでビックリしながら振り向くと、榮川さんだった。

「おはよう」

榮川さんから挨拶されるのは初めてだったけど、挨拶はお返ししないと。

「眠れた？」

「あ、うん、少し寝れたよ。榮川さんは？」

榮川さんとは同じ部屋じゃなかったから、どこか別な部屋にいたのだろう。

「眠れた」

「そ、そう」

「朝食は食べた？」

「あ、いや、まだだけど」

「食欲がなくても食べるのがいいと思う」

「う、うん」

私が小さく頷くと、榮川さんは話をやめて食堂のある方へ行ってしまった。

「……」

ボーッと榮川さんの後姿を眺めていると

「美結」

（！）

また急に後ろから声を掛けられた。

「あ、なに？ヒデくん」

聞き慣れてるから、今度は声だけでヒデくんだと判る。

「美結、独りで歩いたりするなって言っただろ！」

昨日の夜もこんな感じのときがあったけど、ヒデくんは普段こんな大きな声で私に話さない。

「あ、ゴメン」

だから謝ってしまった。

「どこ行ってたんだ？」

「うん、ちょっとトイレ」

「う...そうか」

ヒデくんは少しバツが悪そうに声の大きさをいつもくらいに戻して

「中までは付いていけないけど、トイレも一人で行くなよ。必ず柚島とか誰か誘えよ」

とだけ言うと背中を向けて部屋に戻ってくるので

「うん、ありがとう」

私はヒデくんの後ろを歩き出した。

部屋に戻った。

「英基，美結は？」

「ああ」

健ちゃんの問い掛けに、ヒデくんは身をかわし、私が見えるようにする。

健ちゃんは短く溜め息をついて

「美結，黙って独りでどっか行くのはやめろよ」

さっきのヒデくんよりは静かな感じで言う。

健ちゃんの言葉は予想できてた。

「うん、ヒデくんにも言われた」

「そうか，じゃあ分かってるな」

「うん。ゴメン，心配かけたね」

健ちゃんもヒデくんも私を心配してくれてたのが，単に嬉しかった。

だから，つなげる言葉はできるだけ明るく言う。

「ねえ，朝ご飯食べに行こう？」

「なに？」

ヒデくんが訊き返す。

「朝ご飯を食べに行こうよ」

「あ，ああ...」

健ちゃんと顔を見合わせるヒデくん。

「先のことはいろいろ考えなきゃだけど，今日は今日で頑張れないとマズイし」

「ん，まあ，それはそうだけど」

戸惑ってるような表情のヒデくんの前で，お腹に手を当てる。

「私，結構寝れたし，お腹も空いたから，大丈夫だよ」

もちろん，嘘。

本当に少し眠れたとはいっても，昨日一日のことやこれからのが気になってしまっていて，食欲なんかないけど，さっき榮川さんに言われたとおりだとは思う。

「英基，じゃあ，行くか」

「ああ」

健ちゃんとヒデくんは同意してくれたけど，まだ部屋の中には4人いるので，他のみんなにも呼び掛ける。

「みんなも行こう？」

私は健ちゃんやヒデくんみたく他の人のことまで考える余裕がないし，たとえみんなから単純で無神経なバカだと思われたって，精一杯明るく振る舞うことで少しでも誰かの気が紛れるならそれでいい。

でも，しばらく誰も動かなかったところを，美愛が立ち上がって
「...そうだね，暗くなってても仕方ないから，まずは食堂行こうか」
私の方へ来てくれたので，他のみんなも立ってくれた。

「よし，行こう」
バレない程度に無理して声を張る。
(これでいいんだ...)

「とにかく，単独行動は駄目だな」

あまりよく眠れなかったが，朝になって目が覚めた。
そしたら，なぜか部屋にはもう誰もいなくて，こっちなら誰かいるかと思って集会室に行ってみた。

そうしたら，長谷田と中岡が二人で話してた。
「おう，野村も来たのか」
長谷田が俺に気付いて右手を上げる。
「ああ，誰かいるかと思って」
「そっか。でも，さっきからずっと俺と中岡だけだ」
「そうなんだ」

「野村，ここに来るまでに誰か見掛けたか？」
中岡に訊かれ，俺は黙って首を振って，手近な所に座った。

二人は俺が来る前からしてた話の続きを始めた。
「そうだな，一人でいるのは危ないな。グループ行動だよな」
「佐藤も根津もほんの少し独りになったところを狙われたわけだしな」
「ああ」
どうやら長谷田と中岡は昨日の佐藤と根津のこととこれからのことを話してるみたいだ。

「メンバーを入れ替えたりしないのが大事だ」

「どうしてだ？」

「昨日みたいなことをした奴が誰か判らないんだから、固定しておかないと危険だろ？」

「ああ、まあそうだな」

「...」

二人とも立派な奴だとは思うけど、こんなことに巻き込まれてる時点で、どうするかなんて話し合ってもしょうがないんじゃないか。

「野村」

その時、突然中岡がこっちを向いた。

「え？」

「朝飯食ったのか？」

「あ、いや、まだ」

「俺等は食ったけど、まあ食堂まで一緒に行ってやるから飯食ってこいよ」

そういうと長谷田も中岡も俺の方へ歩いてくる。

「まだ食堂に誰がいるだろうし」

「あ、ああ」

普段から朝飯なんて食ってないけど、この二人がいなくなった部屋で独りになるのは怖いから、一緒に行くことにした。

(.....)

長谷田と中岡の後ろを歩いた。

昨日ことは、どうしたって思い出してしまう。

根津の死体を見付けたのは仁藤だけど、俺も一緒だった。

俺も工藤も死体のある方さえまともに見れなかったのに、仁藤と鹿生は根津の死体を調べて、「胸と肩と脚が破裂したみたいに裂けてる」とか「両手両足がガムテでグルグル巻かれてる」とか言ってた。

身体が裂けるなんて人の力じゃないから、決まってたことを守れなかったことの罰でなったんだろう。

でも、ガムテでグルグル巻きってのは誰かやった奴がいるはずだし、それは俺達のクラスの奴等の中にいる。

(俺だって、いつやられるか...)

寝てた部屋から慌てて集会室まで来たのも、怖かったからだ。

あの部屋には俺と綿谷と戸田が男で、女子は三田と森と矢口の3人だったのに、朝になったら俺以外はいなくなってた。

あとの奴等がどこ行ったのかは気になったけど、とにかく、部屋に独りでなんかいけない。

さっき長谷田が「メンバーを固定した方がいい」と言ってた。

俺も賛成だ。

この二人もいいけど、昨日のメンバーに固定すれば鹿生と仁藤が一緒だ。

あいつらと一緒に何となく安心できる気がする。

「……え」

吐き気がする。

安齊さんと柚島さんが言うとおりに食堂に来た。

一応朝食なんていうのにしてみたけど、目玉焼きにケチャップがかけてあってスゴク気持ち悪い。

優香と佐藤くんを探してるうち、奥の方の部屋のドアノブが縄跳びの縄で開かないように結ばれてた。

縄をほどいたのは鈴木さん達で、わたしが部屋を開けると…

誰か倒れてるのと、血がいっぱい飛んでるのだけ見た。

ドアはすぐ閉めて、鈴木さん達に誰か呼びに行ってもらった。

曾根嶋さんが側にいてくれた。

そのうち村井くん達が来て、部屋の中に入って行っただので、わたし達は集会室に戻った。

あれがやっぱり佐藤くんだったこと、優香も外で死んでたことは、あとでみんな集会室にそろってから聞かされた。

「……」

「食べれる気しないよね？」

斜め前の安齊さんが言う。

「でも、食べれる物だけは食べた方がいいよ」

安齊さんの隣、わたしの向かいには柚島さんだ。

「…」

「私、サンドイッチもう一つ食べちゃおっと」

「なあーに美結、もう5個目じゃないの、それえ」

「あはは」

(…)

たぶん、柚島さんも安齊さんもムリはしてるんだろうと思う。

わたしみたいに血は見えてないからって、いつもどおりでいれる人達だなんても思えない。

「ケチャップはちょっと…」

わたしがつぶやくと、柚島さんが

「ああ、あたしもそんな好きじゃないよ」

と言って、すぐに安齊さんが

「最初っからケチャップかかって出てくるんだあ、私も気を付けなきゃ」
と言う。

「え？何で，美結」

「目玉焼きにはソースでしょ」

「うそ？塩じゃないの」

「ええー」

大げさに手を振る安齊さん。

それを見てて思った。

(なんか，良かった...)

8時50分になった。

森さんと三田さんが二人で集会室に入ってきて空いてる席に座った。

昨日，9時に集会室に集まることにしてたから，私は8時半過ぎに来て座っていた。

夜の7時と違って，この9時っていうのは法じゃないから，排除とかっていうことにはならないだろうけど，みんな昨日のことがあまりに気になるんだろう。

28人全員が9時よりずっと前に揃った。

(.....)

誰も欠けていないことが，とにかくホッとする。

昨日の夜みんなで話し合っていた時，メールが来た。

8月1日 @国王選挙

～今日中に明日の国王を選挙し国王名を送信せよ～

国王の藍川くんが司会で選挙を始めたら，すぐに中岡くんが手を挙げたので，中岡くんが決まった。

みんなそろったので，中岡くんが前出る。

「みんな知ってるだろうけど，今日の法を決めろというメールが来てる」

(そうだよな)

眠れないまま日付が2日になってすぐメールが来ていたのだった。

今日中というだけで，昨日のように制限時間とかはないらしく，急いで決めなくてもいいのかもしれないけど，みんながいるところで決めてしまった方がいい。

「実はもう考えてきたんだ」

中岡くんは自分の端末の画面をみんなに見せながら

「スゴク当たり前だし、みんなを疑ってるようで申し訳ないけど、他人を殺してはいけないことにする」

少し興奮気味に言う。

(……)

それでいいと思った。

昨日から異常なことだけが続いてきた。

「当たり前なことだって守らなくちゃいけない」という気持ちを取り戻すためにも、これからはずっと、そういう当たり前のことを決める法がいいと思う。

私が拍手をしようと両手を胸の前に持ってきたところで、最前列の長谷田くんが大きな音で拍手を始めた。

たぶん、中岡くんと打ち合わせていたんだろう。

「いいぞ、賛成だ」

またすぐ後ろの方から聞こえてきた声は仁藤くんのような。

私も拍手を始めた。

今日の法律を決めたあと、村井くんの提案で議会っていうのを開くことにした。

ヒデくんが教えてくれたけど、昨日の最初にズラズラツツと読まれてた法律の中に、「シンミンが議会を開いて自治を行う」というのがあったらしい。

村井くんは「別に今すぐ議会で何か決めようっていうんじゃない」とか「できることは何でもやっておいた方がいい」とか言ってて、それにはヒデくんも納得できるようだったので、私も賛成した。

議会を開くには、最初にいろんなことを決めないといけないようで、結構大変だ。

「普通なら議決に過半数の賛成が要るってことになってるけど、俺達の議会は命がかかってるんだし、間違いのないものだけ議会にかけよう、議決には3分の2が要るってことでどうだ？」

「それはいいと思うが、3分の2っていうのは出席してる人数のってことでいいのか？」

「いいんじゃないか。でも、そうすると今度はテイソクスーを決めておかないといけないな」

「テイソクスーか」

「サンセーリツを高くするだけじゃなくてテイソクスーも多くしないと意味がないだろ」

議論してるのは7、8人の人達だ。

大体、私はヒデくんや長谷田くん達が何を問題にしてるのか、何一つ解ってない。

その時

「ゴメン，ちょっと待って」

今まで議論に参加してなかった千賀さんが手を挙げた。

「何だ？千賀」

議論の中心だった長谷田くんが千賀さんの方を見る。

「茉莉亜が見付けたんだけど，シンミンギカイの決まりってデフォルトがあるみたいだよ」

「デフォルト？」

「うん」

立って行って端末を長谷田くんに見せる千賀さん。

「どれ…」

ヒデくんも長谷田くんのところに行って端末を覗き込む。

村井くんも見てる。

「ふーん……」

「テイソクスーはシンミンの過半数だな」

「サンセーリツも同じか」

「1回であげれるギアンが一つっていうのはなあ」

「かなり面倒だな」

話は聞こえてくるけど内容は全然解らない。

でも，端末を見ながら，みんな困ったような顔をしてるのからすると，良くない感じの情報なのかな…

ヒデくんが戻ってくる。

「何だったの？」

そっと訊いてみる。

ヒデくんは2，3度首を振った。

「テイソクスーもサンセーリツもショーシユーホーホーも最初から決まってたよ」

「？」

首をかしげる。

私には，ヒデくんの使う言葉の意味からしてチンプンカンプン。

「今まで話してたことがみんなムダだったってこと？」

だから，「要するに何？」と知りたいことだけ訊き直す。

「一応，1回で1つずつ変えていけるみたいだ」

「1回1つずつかあ」

せっかくヒデくんが答えてくれたので，私もそれらしいことを言っではみたものの，相変わらず何も解っちやいない。

結局、3分の2の人が賛成しないと何か決めれないというところだけを変えて今日の議会は終わった。

「めんどくさあーい」

議会が終わると、森さんが心の底から面倒そうに言ってから机に突っ伏した。

「こんなの二度とやりたくないんだけど？」

三田さんが続いた。

「そんなこと言わないで、これからも協力してくれよ」

「...」

村井くんが言うと、森さんは机に突っ伏したまま腰だけでイスを動かしてから、顔を上げた。

「あのさ、村井」

「何だよ」

「もうなんもないんだよねー？」

「取りあえずはないな」

「あっ、そ」

森さんは、机の横に掛けてたバッグをつかんで立ち上がると

「7時だっけ？そのときまで来ればいいんでしょ？」

と言って、中岡くんが「7時に遅れるなよ」と答え終わる前に部屋を出て行った。

「あたしも行こうっと」

三田さんも行ってしまった。

「ねえ、ヒデくん、さっき誰かが議会には命がかかってるって感じのこと言ってたけど」

「そうだな」

「どういうこと？」

美結が仁藤くんに訊いてることは、あたしも知りたかったことだ。

「最初から決めてある法の中に、議会に提案しても賛成されなかった場合、議会に提案した奴が排除されるっていうのがあるんだ」

「え？そんなのあるのか？」

仁藤くんが美結に答えたことに、鹿生くんが反応する。

「あるんだ、それが」

「排除ってのは、昨日の二人みたいになるってことだよな？」

「そうだ」

「じゃあ、変なことを議会で話し合ったりできないな」

「というか、必ず議会を通るようなことしか提案しちやいけないってことだ」

「なるほどな」

議会には命がかかっているなんて、冗談みたいだ。

おとといまでのあたしなら間違いなく、冗談で済ませるはず。

でも、今はただ怖いだけ。

だって、それはきっとホントのことだから。

それと、とにかくおしゃべりで、あたしを退屈させないでくれる美結が黙ってしまってる。

きっと、あたしと同じような気持ちになったのかも...

今日も眠れないまま何度も寝返りをうつ。

(あ...)

時計を見たら、8月3日になったのが判った。

良かった...

何もなかったんだ...

裁きに因る死亡者

なし

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

28人

8月3日

今日できた穴に
昨日落っこちた

「おはよう」

「！」

突然声を掛けられてビックリしたけど、たぶん榮川さんだ。

振り返ると、やっぱり榮川さんが立っていた。

「おはよう、榮川さん」

「...」

私が猪戸さんと話していたからだろう、そのまま行ってしまった。

「榮川さんの方からあいさつしてくるなんて...」

榮川さんの背中を見ながら猪戸さんが言うので

「おととい建物の中みんな調べたでしょ？」

教えてあげることにした。

「ああ、うん」

「あのとき、私と榮川さんと一ノ木さんが一緒にここの中を調べに行ったからかも」

「へえー」

猪戸さんも意外のようだけど、そもそも私が意外だったりする。

昨日の朝も、おはようと言ってくれた後に、ごはん食べたかとか食べた方がいいとか言ってくれた。

それから、昼ごはんのときは昨日の朝もだったけど隣に座ってて、夜廊下で会ったときもあいさつしてくれた。

でも、榮川さんは集会室だと私の近くには来ないで、必ず右端一番後ろに座ってるようだ。

まあ、集会室でどこに座るかは大体みんな決まってる感じだけど。

「じゃあ、ご飯に行こっか？」

「うん」

美愛の呼び掛けに私も猪戸さんも前田さんも頷いた。

女子達は気楽だと思う。

「昨日何もなくて良かった」なんて、そうじゃなくちゃ言えない。

俺達は昨日佐藤と根津の死体を片付けたんだから。

俺達は崖まで死体を運んで、海に落とした。

夏だし、死体をそのままにしておくなんてヤバ過ぎるのは判る。

死んだ奴のために生きてる俺達がヤバくなれないんだから、片付けるしかない。

片付けるって、ホントなら埋めるのがまともだろうけど、ここって土を掘る道具がないし、手で人を埋めるくらい穴掘るなんて無理だ。

海に捨てるのは普通の考えじゃあり得ない。

あり得ないけど、他にどんな方法もないんだから、そうするしかなかった。

だからって、何で俺達がそこまでやらなくちゃいけないんだ？

死体の片付け方がマズイからって後ろめたい思いをさせられるのもムカつく。

こんなことに巻き込まれて、無理矢理訳の分からないことをやらされてるっていうのに、そんな気持ちまで俺達に押し付けてやがる。

誰が何のために俺たちにこんなことさせてるのは知らない。

最初外を調べたとき、玄関の横にリヤカーがあるのは何でだと思った。

建物の中を調べた女子達が「倉庫に寝袋みたいに大きい袋がある」って言ってるのを聞いた時も何でだと思った。

昨日になってやっとつながったけど、要するに、俺達は死んだ奴を袋に入れてリヤカーで運んで崖から捨てるはずだってどこまで全部読まれてるってことだ。

俺達にこんなことさせてる奴等にとって死人が出るのは当たり前のもので、死体だって袋とリヤカーを用意しておけば、あとは勝手にどうにかするだろうって確信してやがる。

(……)

誰かの手の平で踊らされてるってのくらいムカつくことはない。

でも、だからってどうすることもできないのがもっとムカつく。

最初いきなり佐藤と根津が死んだりしたから、昨日はみんな落ち着かなかったし、少しましな人達は、なんかいろいろ話し合ったりしてた。

みんなの様子をボーッとオレは眺めてた感じだ。

特にやることもないし、朝飯の後は集会室に行く。

これは昨日と同じだ。

でも、昨日の終わりに長谷田が「明日の朝は食事を終わらせてから9時には集会室に集まってくれ。明日の法を決めるから」と言っていたので、一応目的があって、何となく集まってきた昨日とは違う。

「今日の法を送信するので、みんな確認してくれ」

長谷田が言うのとほとんど同時にメールが来る。

端末の画面に触る。

8月3日 @国王の法

～今日の法を【他人に傷を負わせない】にします。 長谷田～

(…)

昨日のと同じで、当たり前の感じだ。

「これじゃ、喧嘩もできないな」

オレの後ろで藍川がつぶやく。

「先に殴った方は終わりだ」

(そうか、そうだな)

それはそれで納得だった。

「まあ、外の世界でだって喧嘩は基本禁止なんだから」

「それもそうか」

藍川の隣で三浦が頷いた。

そっちのは、ちょっと納得できない。

昨日は何もなかったからと早くも忘れた奴がいるのかもしれないが、おとといだぞ、佐藤と根津が死んだのは。

佐藤を閉じ込めたり、根津の手足を縛った奴が、オレ達の中にいる。

そいつはずっと隙を狙ってるんだ。

端末を見れば、オレ達のうち生き残るのがたった一人だってのは、すぐ判るはずだ。

最後の一人になるまで、誰も信じれないし、みんな敵だ。

とにかく揚げ足を取られるようなことは絶対ダメなんだ。

元々分かってはいたが、ホント頭の悪い奴しかいないクラスだ。

ちゃんと考えてるのはオレくらいじゃないのか。

お昼を食べた後に「一ノ木さん、ちょっと話さない」と森さんが言うので、外に来ていた。

「どう？」

「どうって…」

一体の何の話だか分からないまま付いてきたけど、森さんの話は私が考えもつかなかった中身だった。

「迷うような話？」

森さんの側には三田さんと矢口さんがいて

「他に何か考えでもあるの？」

三田さんの口調は強い。

「……」

「まあ、別に無理強いしたいわけじゃないの」

森さんの方は三田さんのように詰め寄る感じじゃない。

「協力が必要、それは解かるよね？」

「…」

無言で頷く。

「じゃあさ」

三田さんが私に向かってくる。

「珠美佳、やめな」

「あ」

森さんに言われて三田さんの足が止まった。

「今すぐ決めれるはずないもんねえ」

そう言いながら、今度は森さんが近づいてくる。

「……」

「少し考えた方がいいけど、そんなに考えてもしようがないから」

森さんは横から軽く私の左肩に手を添えて

「3時まで決めてね」

「え？」

1回ポンと私の肩を叩くと、森さんは行ってしまった。

「愛麗沙」

「…」

三田さんと矢口さんが森さんの後を追った。

私は独りになった。

(そんなことで本当に…)

森さんの言ってたことを、頭の中で繰り返す。

何度繰り返しても、答えは出ない。

正しいとか間違ってるとかじゃない。

私は考え付かなかったけど、森さんの言ってたこと自体は、こういう状況になってしまってるんだから仕方ないんだろう。

だから、正しいんだ。

あとは、私ができるかどうかだ。

(私にできる？)

自分に訊いてみるけど、判らない。

(それでいいの？)

別にそんな大事な物じゃない。

見せれる物じゃない。

自慢できる物じゃない。

第一私は、クラスのみなどと別に仲いいわけでもない。

三田さんが言ってたように「迷うような話？」なのかもしれない。

「おかしいな」

呼ばれたのはオレだってのに、呼んだ奴が来ない。

「何だってんだよ」

急に腕が跳ね上がる。

「！」

跳ね上がった腕がない。

「え？」

何だこりゃ？

急に背中を突き飛ばされる。

(……)

背中がスゴク熱くて、目の前が見えなくなってきた。

(…)

「みんなに報告がある」

7時まで少し間があるけど、席は埋まってるようだった。

みんな長谷田くんの方に目を向ける。

「あ…」

首を振る。

「あ…実は」

今度は視線を落としてしまった。

(？)

スゴク言いにくいことなのかな、と思う。

(ってことは…)

昨日は何もなかった。

でも、おとといは…

今日も何かあったんだ…

決意したようにして長谷田くんが顔を上げた。

「ここに戸田はいない」

「は？」

長谷田くんは声を上げた森さんの方をチラッと見てから

「体育館みたいところに道具を入れてる部屋があるんだ」

と続ける。

「だから？」

森さんは組んでた脚を下ろした。

「あ、そっか、戸田ってそこにいるんだ」

「……」

長谷田くんが何も答えないので、かえってみんなそれが正しいんだと判った。

そして、長谷田くんが本当に言いたいことも…

「ちょっと待て、まだ7時になっちやいないぞ」

村井くんに続いて

「戸田以外はここにいるようだしな」

グルッと見回した田月くんが言う。

「茉莉亜」

「え？」

隣から理璃の声が聞こえてハッとした。

いつのまにか、理璃の手を握っていたのだった。

「あ、ゴメン」

「いいよ、別に」

「うん…」

集会室の中はスゴイ重い感じだ。

ちょっと離れた所にいる安齊が仁藤に訊いて、仁藤が答えてた中身は俺にも聞こえてた。

最初は長谷田の言ってる意味がほとんど解らなかったけど、こういうことじゃないのか。

戸田は死んだ。

長谷田は死んでた戸田を体育館の道具部屋で見付けたんだ。

何で死んだかって？

法を破ったからだろ。

何の法？

誰かをケガさせちゃいけないって法だ。

だって、まだ法は3つしかない。

他にあるのは、集会室に7時に集まるってのと誰かを殺すなっただけ。

俺にも解ってきた。

戸田がいないまま7時になった。

メールも来てるし、明日の国王を決めなくちゃいけない。

戸田の話は一旦終わりにして、長谷田が明日の国王に立候補する人がいないか訊いた。

「俺がやる」

手を挙げたのは仁藤で

「他に誰かいるか？」

と長谷田が言ったけど、もう誰も手を挙げなかった。

「よし、じゃあ、明日の国王は英基だ」

そう言って長谷田は空いてた席に座って、代わりに仁藤が前に出る。

昨日の藍川くんの次が長谷田に決まったときもそうだったけど、次の国王が司会みたいになってしまうのかもしれない。

「じゃあ、法を決めるぞ」

仁藤は元々考えてたのだろう、前に出てすぐ端末の画面を見せながら

「傷を負わせないじゃ生ぬるいのかもしれないから、いっそもう暴力を禁止する」

私には画面の字までは読めないけど、きっと『他人に暴力を振るうな』という感じのことが書いてあるんだろう。

「わたしはいいと思う」

真っ先に拍手を始めたのは前田さんだ。

「ま、別にいいんじゃないーい」

左前の方で陣取ってる森さんもパンパンパンと3回だけ手を叩いた。

パラパラパラと他の拍手が続いて、明日の法も承認されたようだ。

「戸田が誰かケガをさせたとしたって、告発さえしなければ、あんなことにならなかったんだ」
「見た感じ、戸田を殺したくなるほどヒドイ怪我してるような奴はいなかったしな」

今日の集会が終わった後、ヒデくんのところに中岡くんと長谷田くんが来た。

「その道具室ってのはやっぱりドアを開けられないようにしてあったのか？」

「いや、引き戸だし、実際そうはなってなかった」

健ちゃんの質問に中岡くんが答えた。

（やっぱり中岡くんも一緒に見付けたんだ...）

「健蔵、たぶん戸田は誰かに傷を負わせたって理由で告発されたんだから、閉じ込められたわけじゃない」

「あ、そっか」

「……」

ヒデくんは何かを紙に書きながら考え込んでるようだった。

フツと周りを見てみると、ほとんどの人達は、まだ集会室に残ってて、健ちゃん達の話聞いてる。

「告発した人は名乗り出ろ、と言ったところで、やった奴は反応しないしな」

「まあ、そうだろうな」

「何かしでかしたときのお決まりだしな」

「ああ」

自分に都合の悪いことは隠す。

私だって時々してたことだし、そんな責めれることじゃない。
(本当は、隠し事なんてしないで、みんな協力しなくちゃいけないのに...)

健ちゃんがヒデくんをちょっと見て
「英基、そういえば、明日の法をどうして告発するなってしなかったんだ？」
訊く。

(！)
健ちゃんの質問は私も頭をよぎったことだった。

でも、ヒデくんはペンをポンと投げ出して
「バカだな、健蔵」
とだけ言った。

「バカって、英基」
別に健ちゃんは怒ってないようだったけど、ヒデくんにすっかり向き直った。

「健蔵、作れる法は前の法に矛盾しないものってことになってる」
「ん？」

「一番最初から決まってる法の中に、法の違反は告発で確定するっていうのがあるから、そもそも告発自体できなくする法なんて絶対あり得ない」

「そうか？」
健ちゃんは首をかしげた。

(それはそうかも...)

ヒデくんの言ったことは私には解った。

「それもそうだな。それに、告発できなくなったら法を守らなくても罰せられないことになるから、決める意味もなくなって、そっちも矛盾だな」

「ん、まあ...」

健ちゃんが腕組みして頭を後ろにそらした。

こういう感じのときって、健ちゃんは、ホントのところ納得できたり解ってたりはしないんだって私にはバレてるんだけど、健ちゃんに言ったことはない。

「いつまでもそのままにしておけないんだし、まずは戸田を運びに行くぞ」

集会室にいる奴等みんなに向けてだろう、田月が言うので、俺も椅子から立った。
もちろん気は進まない。

こんなことやりたい奴なんていないだろうし。

昨日やって判ったけど、根津みたく小さい奴だって死体になるとスゴイ重い。
戸田は普通体型だったはずだけど、運ぶ人数が多いに越したことないはずだ。

「協力が必要」なんて奴もいるけど、俺は別にそういうわけじゃない。

死体をほっとくとヤバい。
それだけだ...

裁きに因る死亡者

戸田龍太

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

27人

8月4日

次どうなるかなんて
知って何になるの？

(……………)

さっきからボーッとしたまま端末の画面を眺めている。

画面には

8月4日 @国王の法

～今日の法は【他人に暴力を振るわない】ということにするので、みんなよろしく。 仁藤～

とある。

着信には気付かなかったが、目が覚めたときにもう来ていた。

今日にならないと法は送信できないから、生真面目なとこのある仁藤は日付が変わった途端送信したんだろう。

それにしても馬鹿馬鹿しい。

何が暴力かなんて誰が決めるんだ？

間違っただけのどっかが触っただけで「暴力振るわれた！」なんてことになるかもしれない。

まあ、オレだけじゃなくて、お互い様だけど、誰かに近付くわけにもいかなかった。

結局、何も考えてない奴が多過ぎる。

ちゃんと何か考えてるのはオレぐらいじゃないのか、ホント。

起き上がって、薄く日の差した部屋の中を見る。

すぐ隣にいたのは中岡。

まあ、力も強いし声も大きいから、機嫌を損ねない限り役には立つ奴だ。

それから長谷田。

元々そういう感じの奴だったけど、馬鹿のくせに最初の日からリーダー気取ってるのがバレバレでムカつく。

でも、オレをどうこうしようってんじゃないから取りあえずは放っておこう。

長谷田から随分離れて窓際にいるのは、前田と双子の鈴木だ。

女は面倒なだけで、別に怖くない。

どんなときでもオレの方が頭も力も上だ。

振り返る。

入口は内海の場所にしてある。

体がデカイこと以外、役立たずの間抜けだ。

でも、出入りの邪魔になるから、夜障害物として転がしておけば、何かと便利だ。

オレがトイレに行きにくいのは、まあ、しょうがない。

この3日で、他の奴らの馬鹿さ加減も大体判った。

ホント、馬鹿の巻き添えにならないようにだけ、気を付けてないとな...

眠れなかったし、最低の気分だ。

それも、ただ単に眠れなかったわけじゃない。

佐藤と根津には悪いが、死人が出るのは、あの二人で終わりにしたかった。

だから、本当のどこ俺のガラじゃないって分かってても無理してみんなに呼び掛けてたんだ。
でも、昨日戸田が死んだ。

戸田の死体は根津よりはましな形をしてたけど、だからかえって一瞬で死んだわけでないのが判った。

見たところ、少し這ってたような跡があった。

一体戸田は誰に怪我させたんだ？

というか、最初の日のこと、法を守らなかったらどうなるのか戸田にだって解ってたはずだから、わざわざ自殺行為みたいなことをするはずない。

佐藤と根津のときは、告発したらどうなるのか知らないでやったのかもしれない。

でも、昨日のは違う。

告発したら戸田は死ぬ。

そう解ってる奴がやったんだ。

戸田を殺すつもりで告発するような奴が、何でもない顔をして集会室にいた。

夏休み前までずっとクラスで一緒だった同士なのに...

「独りでいちゃいけない」ということを中岡と話したのは、おとといのことだ。

中岡は戸田を殺そうと思った奴じゃないだろうし、独りにならないため必要な人間だろう。

中岡とは一緒に行動してた方がいい。

二人ってのも何かあったときどうにもできない。

仲間は多いに越したことはない。

じゃあ、健蔵はどうだろう？

健蔵は基本、気のいい奴だし、他人のことを考えれる。

健蔵といれば、スゴく力になってもらえそうだ。

英基は？

英基も必要だ。

いろんなことにピンとくるし、決断力もある。

(他にいた方がいいのは.....)

(え？)

そのとき、自分で自分に驚いた。

いつのまにか俺は、誰かの要る要らないを考えてる。

何なんだ？

要るんじゃないければ、どうなって欲しいんだ？

こんなことになってそんな人間になったのか、俺は。

それとも最初から、俺は...

何回も寝返りしてるうちに、朝だった。

何であんなことしちまったのか考えると眠れなかった。

どうして龍太が死んだか分からないとみんな言ってたけど、俺は分かってる。

まあたぶん、俺にしか分からないはず。

俺の知ってることは誰にも話せない。

俺のことだって龍太と同じわけで訴えられるんだから、話した奴が俺を訴えたら、それで終わりだ。

(.....)

誰にも話してないからって、俺以外に知ってる奴がいる。

というか、それも本人なんだから、知ってるっていう言い方も変だけど、あいつにしてみれば、いつでも俺のことを訴えられるわけだ。

俺はホントの意味で命を握られてる...

何であんなことしちまったんだろう...

(.....)

トイレに行くため、部屋の外に出る。

廊下はシーンとしてる。

「？」

玄関の方に誰か歩いてくのが見えた。

「何だ？」

目をこらしてみると、パーカーのフードをかぶった奴が玄関から外に出て行くところのようだった。

(...)

何となくだけど、フードから髪の毛みたいなのが漏れてる感じがする。

ってことは、あいつは女子なのかもしれない。

パーカーが誰なのか確かめようと、そいつの後ろをついてく。

上は、スゴいぶかぶかのパーカーで、下もだぶだぶしたスウェットみたいなのを着てるようだ。

どっちもサイズは全然合っていない。

俺のことなんて気付くはずもないし、どんどん歩いてくうちに建物の角を過ぎて森の方に向かってる。

突然パッと振り向いた。

「え！」

パーカーは、俺が思ってもいない奴だった。

「お前、何やってるんだ？」

と俺が言ってるうちに、こっちに走ってきた。

「おい！」

全然止まらないまま、俺の横を走り抜けた。

「お前、待ってって」

「へえー、そうなんだ」

「うん」

舟山さんが小さく頷く。

今日の朝ご飯は舟山さんの隣で食べてた。

「舟山さんはレヴィア法だっけ？随分詳しいんだねー」

「あ、いや、わたしは...」

舟山さんはチラッとどこか別な所を見てから

「...村井くんと藍川くんがいろいろ話してるから」

「そうなんだー」

「うん」

頷いた舟山さんの後ろで、席を探してたみたいだった榮川さんが舟山さんの背中合わせに座るのが見えた。

「ホント情報が欲しいよねえ」

(！)

いきなり横から声が聞こえてビックリ。

「美愛...」

いつの間にか私の右に座ってたのは美愛。

座ると、美愛はフーツと溜息をつきながら自分の髪をバレッタで留めた。

「いただきます」

そう言って美愛が箸を持つのを待ってから声を掛ける。

「ねえ、美愛」

「んん？」

「今さっき言ってたことって」

「ん？」

「情報が欲しいって」

「あー」

せっかく持ち上げた箸を置いてしまった。

「もーホント訳分かんなくて頭おかしくなってきたよ」

頭を抱える美愛。

(美愛でも...)

私がいつも感じてたのは、美愛のストレスへの強さだ。

美愛は大抵のことなら笑って済ますし、私ならパニックしてしまうようなときでも落ち着いてたような気がする。

私は能天気だけど、瞬間踏み止まれる強さは美愛に全然敵わない。

「美愛、大丈夫？」

「半分くらいダメー」

頭を抱えたまま左手だけをヒラヒラさせた。

「半分は大丈夫そうだね」

「まあねえ」

もう一度私が声を掛けると、美愛は元に戻った。

美愛が食べ始めるのをまた待って、声を掛ける。

「美愛は何が知りたいの？」

「いーっぱいあるよ」

チラッとこっちを見た。

「そうだね、私もそうだよ」

「美結も？」

「うん」

「そっか」

「うん」

「あたしが来る前、美結と舟山さんとでレヴィア法？の話してたでしょ」

「ああ、うん」

「まずやっぱりこんなことになってるのは、そのせいなんでしょ？」

「たぶん...」

ヒデくんもレヴィア法の話をしてくれたけど、細かい中身までは知らないようだった。

一人一人に渡されてる端末には、いろんなことが載ってるのに、ヒデくんが調べても端末の中でレヴィア法の中身を知ることはできないようだった。

でも、舟山さんはレヴィア法に何が書いてるのか知ってたみたいで、さっきの話になってたところに美愛が来た。

「なっちゃってるから、何でなったか考えても意味ないけど」

「うん」

「これからどうしなくちゃいけないのか分かるためにはレビア法？を知ってないと」

「そうだね」

美愛の言葉に頷きながら、思わず舟山さんの方を見てしまう。

「...」

私の視線に気付いたのか、舟山さんは顔をそむけて

「...私，行くね」

慌てて立ち上がってトレイを手を持つ。

「じゃ」

そのまま行ってしまった。

「あたし来たからかな」

「あ，いや，そうじゃないと思うけど...」

美愛ほどじゃないけど，私にも戸惑いはあった。

美愛は私の右隣から向かいに席を移した。

「美結が舟山さんから聞いたことだけでも聞かせてよ」

「ああ，うん，そうだね」

「...って，このくらいかな，私が教えてもらったことって」

私は食べ終わってたから，美愛には食べさせておいて，さっき舟山さんから聞いたことをみんな話した。

「ふーん」

時々相づちは打ってたけど，手は休めなかった美愛は，私が話し終わった頃丁度食べ終わった。

「まあ，聞いたからって，すぐにどうなるってわけじゃないけどねえ」

「うん」

美愛に言われるまでもなく，私だってレヴィア法のことを聞いて何かに役立てれるわけじゃない。

急に美愛が目線を私の頭の上の方に向けた。

「お早う，仁藤くん」

「！」

（ヒデくん？）

「お早う」

聞き慣れた声に振り向くと，少し離れた所だったけど，もちろんヒデくんがいるのが見えた。

私は立って行って

「ヒデくんはもう食べたって言ってなかったっけ？」

話し掛けると

「飯はだいぶ前に食ったけど」

ヒデくんが持ってた紙コップをグッとあおって

「水が飲みたくなったら来ただけだ」

と言うその横で

「俺は飲みたくもないのに英基に連れられてきた...」

わざとらしく健ちゃんがガックリする。

「しょうがないよ」

「何が？」

健ちゃんが顔を上げたから、私はわざと顔をそらして言う。

「健ちゃんもヒデくんも、私には独りになるなって言うのに、自分は独りになりたいなんて」

「いや、別にそんなことは」

「健蔵、美結の言うとおりで。誰だろうが独りになるのは駄目だ」

ヒデくんが健ちゃんの腰をバシッと叩く。

「ああ、はいはい」

健ちゃんが苦笑いを浮かべて

「英基も美結もいつも正しいよ」

軽くヒデくんの背中を押す。

押されたヒデくんも苦笑いしてから

「そういえば、美結」

私を見る。

「なあに？」

「起きたときから工藤を見てないんだけど、美結は見てないか？」

「工藤くん？」

工藤くんとは同じ部屋だ。

美愛も同じ部屋なんだし、ちょっと美愛を見たけど、スッスッと首を振る。

「私達は見えない」

「そっか」

ヒデくんが短く溜め息をついた。

「じゃあな、美結」

「柚島と一緒に帰って来いよ」

「うん」

健ちゃんもヒデくんも行ってしまった。

じゃ、美愛のところに戻ろうかな、と向き直ったら、私のすぐ後ろに榮川さんが立ってて、あぶなくぶつかりそうになった。

「...」

「どうしたの？」

榮川さんに訊いてみる。

と、私の方は見ないで

「二人は安齊さんだけを名前で呼ぶようだ」

と言うので

「ん、まあ、二人とも小学校から一緒だし」

と答えた。

「...」

それまでずっと健ちゃんとヒデくんの背中を見ていた視線がゆっくり私に向いた。

(もしかして...)

「あの、榮川さん」

「...」

別に返事はなく、でも私から視線を外さない。

「もし良かったら、榮川さんも美結って呼んでよ」

「分かった」

即答。

だから

(言ってみようかな...)

私としては結構な勇気で榮川さんに切り出す。

「榮川さんのことも名前で呼んでもいい？」

「シュテフか栞那で」

まるで私が言うのを知ってたように即答なので、ちょっとビックリ。

「じゃ、じゃあ、っと、えー、呼び捨てもなんだからあ、か、栞那ちゃん、にしてもいい？」

スゴくどもってしまった。

「分かった。私は美結さんにする」

「うん」

私が頷いたのを見て、栞那ちゃんはやっと私に向けた視線を外し、行ってしまった。

(.....)

初めて栞那ちゃんに対する私の読みが当たったことや栞那ちゃんと名前で呼び合えるようになったことは、栞那ちゃんと少しでも心が近付いた気がして何となく嬉しかった。

日付が変わるまで、あと2分。

朝の集まりに、工藤が来なかった。

それだけで、工藤がどうなってるかなんて判りきってたけど、また手分けして探すしかなか

った。

そして、森の近くまで行ったところで、田月が見付けたらしい。

工藤は、やっぱり死んでた。

頭が半分なくて顔なんて判らなかったけど、あれが工藤じゃないはずないんだから、工藤なんだろうって田月が言ってた。

胸

脚

腕

腹

背中

今まで裁かれた4人からすれば、身体中どこでも吹っ飛ばされる可能性があるみたいだ。

(それにしても...)

幸い...

幸い？

いや、もう、何か、どうでもいい感じがする。

とにかく、朝に工藤が死んだ以外、あとは誰も死なないまま日付が変わるようだ。

やっぱり、幸いか...

裁きに因る死亡者

工藤満

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

26人

8月5日

地獄につながった道って
何でできてたんだっけ？

不思議だ。

あたしは昨日までに死んでしまった4人の誰とも友達じゃなかった。
そりゃ同じクラスなんだし、話したことくらいはあるけど、でもそのくらいは友達なんかじゃないはず。
だから、スゴいショックを受けたのは最初の日だけ。
戸田くん、工藤くんが死んでも大して何も感じなかった。
いつかあたしの番が来る。
そのことだけは考えないようにしないと、平気でいれる自信がない。
でも、気が付くと考えてる。

あたしの番がいつか来る...

今日の国王は鹿生だ。
昨日、工藤が来なくて、たぶんみんな工藤が死んでるだろうって雰囲気の中で、それでも国王を決めなくちゃいけないからって鹿生が手を挙げたのだった。
昨日の国王は仁藤だったし、仁藤とつるんでることが多い鹿生が国王というのは、マズいと思った。
同じ人間が続けて国王になれないとはいっても、2人が交代でやれば何の問題もない。
そういうのを制限する法を作ろうと思ったら、まず国王になるか、国王を動かせる人間でいるかだけど、俺に仁藤とか鹿生を動かすのは無理だし、もし仁藤達が国王を独占するつもりなら、俺には“何となくこいつでいいか”的な低レベルの世界の支持だと仁藤達を上回れないだろう。

そんなことを考えてると、田月が端末を見てるのに気付いた。
「どうした？」
俺が声を掛けると
「いや」
田月は俺の方を見ないで
「鹿生が法を作ったみたいだから」
と言う。
「ホントか」
ポケットに手を入れたら端末がない。
そうか、さっき着替えたときに移してなかったんだ。
「どんなのだから、ちょっと読んでみてくれないか」
「ああ」
田月は、やっぱり俺の方を見ないで
「じゃ、読むからな」
端末に視線を落とす。
「国王選挙は選出された数の少ない者を優先する」
「なに！」
俺が少し大きな声を出したせいか、田月がビクツとした。
「...急にデカイ声出すなよ」
「悪い...」
顎を引くくらいだけ頭を下げ、すぐに田月の端末を覗き込む。
「.....」
確かに書いてある。
(どういうことだ?)
急にだから、うまく考えがまとまらない。

さっきも思ったが、仁藤と鹿生は、まだまだバラバラにならないだろう。

それなりに頭のいい仁藤と、何となく人が集まる中心になりやすい鹿生がつるむのは俺にとって邪魔でしかないが、今は正面切って奴らと争うわけにはいかないから、あいつらとの接し方は考えどころだった。

奴らの方が自分で自分達が国王になり続けれることを放棄するなんて...

何か仁藤に考えがあるのか。

いや、むしろ何も考えてない鹿生の自爆なのか。

「お早う」

「あ、お早う、栞那ちゃん」

ヒデくんには、考えるなって言われてるけど、元々別に仲良くしてたわけじゃない工藤くんでも、いなくなってしまったというのはショックだ。

ここに来てから3回、同じ部屋で夜を過ごした。

同じ部屋にいるんだから、少しくらいは話もした。

みんながみんな不安な中で、話すくらいしか気を紛らわせれなかった。

そういうのからすると、いなくなってしまった4人の中では一番接点があったことになる。

そんなことを考えていたら、ボーツとしてたんだろう、声を掛けられるまでは栞那ちゃんが横に来てたって知らなかった。

「雨」

「え？」

栞那ちゃんのつぶやきで窓の方を見たら、雨が降っているみたいだ。

「.....」

私はチラッと見ただけなのに、栞那ちゃんはジーツと窓の外を見続けてる。

(何か見えるのかな...)

栞那ちゃんの視線の先を探す。

(特別変わったものはないようだけど。。。)

私は窓の外を見るのをやめてしまった。

「...」

(それにしても...)

栞那ちゃんはフランス人形みたいだ。

背中の中分くらいまであってファーツと超ゆるいウェーブがかかった金髪やサファイアばりに青い眼、真っ白い肌、高い鼻、パツと見て判るふっくらした胸...

外見だけのこと言っただって、何の個性もない、普通ど真ん中の私には羨ましいくらいいっぱい何だって持ってる。

栞那ちゃんが勉強もできるのかどうかは分かんない。

でも、やっぱり中の中くらいの成績な私からすれば、何となく栞那ちゃんの言葉のところどころが頭いい感じに思えてた。

「.....」

結局何も話さないまま栞那ちゃんは集会室の方へ行ってしまった。

もちろん、私の方は「雨」と言ってからは一回も見なかった。

私がいたことなんて忘れてしまってるのかもしれない。

ここに来て初めて、今日は雨だった。

何もすることがないので、朝集会が終わった後は図書室に来ていた。

図書室には意外といろんな本があった。

でも、わたしにとっては大して興味ないジャンルのものしかないけど、3冊本棚から出して、閲覧席みたいな所まで持って行くと

「あ」

ビックリした顔の舟山さんが座ったまま顔を上げていた。

「舟山さんも来てたんだ」

「うん」

「わたしは今日初めて来てみたんだけど、舟山さんは前から？」

「...最初の日から」

「へえ」

机に本を置いて、舟山さんの斜め前の椅子を動かして座る。

「...1人？」

「え？」

ポツツと舟山さんが言うので、

「1人で来たのかってこと？」

訊き返すと、舟山さんは何も言わないで頷いた。

「そうだね、ここには1人で来た」

舟山さんに答えた丁度そのとき、奥の方から誰か出てくるのが判った。

一ノ木さんだった。

「一ノ木さんと2人で来てたんだ」

舟山さんが頷く。

「.....1人でいるのは怖いから」

やっと聞こえるような声で言いながら、一ノ木さんは舟山さんの隣に座った。

「怖い？1人が？」

思ってもいなかったことを言われて訊き返すみたいになってしまったけど、瞬間わたしも気付いた。

「そっか、そうだよね...」

暑くてにじんでた汗が急に凍ったみたいに寒気がした。

(わたし、何て危ないことしてたの...)

ここがどこだかは知らない。

ここには私達しかいない。

でも、ここは安全な場所じゃない。

ホントなんだ...

夜の集会の前、誰か足りないってことがなくて、何よりホッとした。

しかも結局今日は1日中雨。

きっと誰も外に行かなかったんだろう。

図書室で本を読んでもうちに茉莉亜も来たので、あとはずっと茉莉亜と一緒にいた。

そうすると、どこに行っても独りでいる人はいなくて、私の感じた寒気はスゴい正解だったことを改めて知ってしまっていた。

というところで、集会の方に意識を戻す。

「じゃあ、明日の国王を決めるんで、やりたい奴がいたら手を上げてくれ」

今日の国王は鹿生くんなので、明日の国王を決めるための司会をしている。

「誰かいらないかあ？」

鹿生くんが左右を見回してるように、わたしも目線だけグルーッとみんなを見渡す。

「っと…」

誰も立候補してくれないので、鹿生くんが戸惑ってるようだ。

こういうのは初めてだ。

昨日までは誰かかれか立候補してたのに。

「…」

お昼に食堂で安齊さんが柚島さん達と言ってたことを思い出す。

言ってたことは大体2つ。

国王って、別に何か特別な権力とかがあるわけじゃなく、他の人と違うのは、まあ法を決めるくらいしかない感じなこと。

でも、何日も経ってしまうと、前からある法がジワジワ縛りになってきちゃうので、法の作り方って難しくなりそうなこと。

(そうだよね)

今日まで見てて、国王になったからということで大変なことはあまりなさそうだけど、後になる程大変になってくるというのも合ってる気がする。

(そういうことなら、こういうときにパッとやっておく方がいいのかも…)

「はい」

「お」

手を挙げると、すぐに鹿生くんが反応する。

「千賀、やってくれるのか？」

「うん」

わたしが頷くと、鹿生くんがホッとしたような嬉しそうなような表情を浮かべた。

「ええと、千賀が明日の国王をやってもいいって言っただけど、みんなそれでいいか？」

鹿生くんがみんなに問い掛けると、後ろの方からパチパチと音がする。

安齊さんだ。

安齊さんの拍手に続いて、数人が拍手をしてくれて、すぐに全体に広がった。

「じゃあ、明日の国王は千賀ということにします」

そう言いながら、鹿生くんは手招きをする。

安齊さんと仁藤くんが立って行って、鹿生くんの左右に並ぶと、鹿生くんが端末の操作を始めた。

(明日の法ってどんなのにすればいいかな)

(わたしも何かちゃんと考えなくちゃ)

夜の集会が終わってからも珍しく栞那ちゃんが座ったままだった。

いつもならどこかにすぐいなくなっちゃうのに。

「栞那ちゃん、いい？」

思い切って声をかけてみたら、別に私の方は見なかったけど

「なに？」

反応してくれた。

「その、良ければさ、ちょっとだけ話せない」

「…」

チラッと私を見てから

「分かった」

パッと立ち上がった。
「ここでより廊下に行こう」
「え？あ、うん」
どうして廊下なのかとは思ったけど
「じゃ、行こう、廊下に」
私が先に廊下に向かって歩き出す。

「っとお...」
いざ廊下で話そうとしても、何から話せばいいのかな。。
廊下には窓があって、夏だから夜7時でもまだ何となく明るくて、中庭みたいになってる場所が見える。
「そうだ、栞那ちゃん」
「なに？」
「今朝私と会ったとき、雨って言ってからずっと窓の外見てたけど、何を見てたの？」
これは確かに少し気になってたんだ。
「何を見ていた...」
栞那ちゃん表情は別に変わらない。
「...つに...だい...か」
途切れ途切れにつぶやきが聞こえて
「雨の降り方」
ポツツと出た。
「雨の降り方？」
思わず栞那ちゃんの言葉をそのまま返した。
「...降り方って、何で？」
そして、探るような感じで訊いてみる。
「ここは、北緯32度20分から80分どこかだから、雨の降り方でも何か判らないかと」
「ええっ？」
自分でもビックリするような変な声をあげてしまった。
そして頭の中がハテナでいっぱいになる。
でも、たぶん栞那ちゃんには全部当たり前のことみたいだから、何から訊いていいのか、そこだって分からない。

「っと、それで、何か判ったの？」
頭の中ハテナを無理矢理蹴散らして、栞那ちゃんの言ってることをつなぐようなことを訊く。
小さく左右に首を振った。
「そっか」
やっぱりのようだ。
ガッカリしかけたけど、栞那ちゃんが左足をちょっとだけ後ろに引くのが見えた。
(あ、こっから行っちゃう)
いろんな偶然が重なったんだろう、栞那ちゃんは私の誘いに乗って廊下に来て、今、立ち止まって話してくれてる。
どうかしてもう少しくらい栞那ちゃんと話したい。
「そうだ、あの、いいかな、訊いても、ね？」
しどろもどろに言う、それでも栞那ちゃんが行っちゃうのをやめてくれた感じで
「何を？」
左足を戻した。
「栞那ちゃんはハーフとかなの？」
「ハーフ？」
「あ、ほら、名前とか髪の色とか」
「ハーフとは違う」

ピシャツとした口調。

最初の日一緒に歩いてたときと同じだ。

「私の場合」

まだ話が続くところも同じ。

何か、栞那ちゃんのパターンの一つが解ったみたい。

「高倉村生まれの父方祖父が、Salzburg（ザルツブルク）生まれの祖母とドイツ在住中に結婚、母方はアメリカ移民で祖父がGdansk（グダンスク）、祖母がKarlovy Vary（カルロヴィヴァリ）生まれ」

「はあ...」

スラスラと言いつつ切られたので、訊き直すこともできない。

「私の外見は祖父母4人中3人のドイツ系に由来するはず」

「うん」

おじいさんおばあさんの生まれた場所とかは初めて聞く場所ばかりで、どこら辺なのか全然分からなかったけど、栞那ちゃんの顔立ちとか金髪とか青い瞳とか、見た目のことは全部、おじいさんおばあさんの4人のうち3人がドイツ系というのが理由なのだけは解った。

「っと...」

「少し話そう」なんて言うておいて、元々何話そうかなんて考えていなかったし、栞那ちゃんが自分で話振ってくれるわけでもないようだから、とうとう話題がなくなってしまった。

「あ、そうだ」

その時、千賀さんが言っていたことを思い出した。

「そういえば、栞那ちゃん」

「なに？」

「2日目って、図書室に行ったんでしょ、どんな感じだった？」

「2日目？」

「私、あるのは知ってたし、仁藤くんとかは行ったみたいだけど、私は行ってみたことなかったから」

手を振ったり照れ隠しみたいに笑いながらの私と違って、訊かれた栞那ちゃんは、ちょっと首をかしげるようにした。

「舟山さんから聞いた？」

「え？」

私の訊いたことには答えなくて逆に訊かれてしまった。

「舟山さんから聞いたっていうことで、私は千賀さんから聞いたよ」

でも、訊かれたことに答える方を先にした。

栞那ちゃんから話題が出るなんて、きっとあまりない気がしたから。

「そうか、舟山さんか」

「うん」

「確かに舟山さんもいた」

「そうなんだ」

（あ、今って）

何かいいタイミングみたいな感じがしたので、昼から結構気になってることを訊いてみることにした。

「あの、栞那ちゃん、ちょっと訊いてもいい？」

「なに？」

「うん。栞那ちゃんは夜どこにいるの？」

「夜？」

「夜を過ごすための部屋って誰々が一緒なのか、お昼に話してたら大体判ったんだけど、どれにも栞那ちゃんはいないみたいだから...」

「...」

私に真っ正面を向けた青い瞳から一直線で向かってくる視線。
見られてるだけで凍ってしまいそうに冷たい...
怖いというのとは違うだろうけど、胸がドッキンドキンとする。
心臓を突き刺されちゃってるみたいな感じ...
栞那ちゃんからってより、こんな視線を誰かから向けられたことが初めて.....
私は軽い気持ちで何となく訊いてみただけだった。
でも、栞那ちゃんにしてみれば、スゴく訊かれるとイヤなことだったのかもしれない。

「...ゴメン。言いたくないなら答えなくても」
だから、たまらず謝ってしまった。
「...ん」
「え？」
「そう」
「？」
「教えられない」
さっきからずっと氷の矢みたいな視線を私に向けてたけど、栞那ちゃんは、それを外さないまま小さく首を振る。
「いいよ。ゴメンね」
「...」
やっと視線を外してくれたのと同時に、栞那ちゃんは何も言わないで私に背を向け、そのまま行ってしまった。

(栞那ちゃん...近付けたような気がしてたのは、私の思い上がりだったんだね.....)

裁きに因る死亡者

なし

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

26人

8月6日

爆弾が危ないだって？

今日も一緒に寝てたよ

どうしようか、スゴク悩んだ。

でも結局、誰にも相談しなかった。

かえってなんか力が抜けたみたいな感じがした。

寝る部屋に戻ってから、茉莉亜と話してたけど、電気もついてない部屋で話してるのは昨日までとおんなじなのに、いつのまにか眠っていたようだ。

夜中に目が覚めたとき、日付が変わってるのを確かめて、隣を見たら茉莉亜もスヤスヤ寝てた。

茉莉亜に背中を向けて、考えておいた文章を端末に打つ。

「……」

送る。

8月6日 @国王の法

～今日の法は【他人の物を自分の物としてはいけない】と決めました。千賀～

考えたって、どうすればいいか分からないし、どうなるか分からない。

それよりは今の一瞬一瞬に気を付けてる方がいい。

目を閉じる。

自分自身、もっと神経が細いと思ってたけど、意外とそうでもないようだ。

全く眠れなかったっていうのは最初の日だけ。

あとは、どうにか眠れてる。

どんなひどい毎日でも結局そのうち慣れてくるのかも。

実際さっきまではぐっすり寝てたような気がする。

(朝になって起きたら、どんな1日になるかな...)

朝ご飯のあと、美愛がトイレに寄ると言ったけど、廊下には何人か他の人も歩いてるし、私は別に用を足すほどじゃなかったから、トイレの前で美愛を待ってた。

今朝起きてからのことを思い出す。

いろいろ考えてるうちに朝になってた。

(寝れないかと思ってたって、いつのまにか寝てるんだよな...)

こんなだから「美結は、のんきだ」なんて言われちゃうけど、私なりに一応悩んだりショックは受けてる。

たとえ私には悩むのが似合わないんだとしても。

(あ...)

向こうから葉那ちゃんが歩いてくる。

昨日変なことを訊いてしまったために、今日こそ無視されてもおかしくない。

「おはよう」

でも、私の前で立ち止まった栞那ちゃんは、自分から挨拶をしてくれた。

「おはよう。食堂で見掛けなかったけど、ご飯はまだだった？」

それだけだって私にとって精一杯勇気を出した問い掛けに

「まだ」

栞那ちゃんは昨日までと何も変わらない落ち着いた調子で即答してくれた。

「そうなんだ」

ホッとしながら続ける。

「今朝は、和食が多い感じだったよ」

「そう」

それだけ言うと、私の横を通り抜けていく栞那ちゃん。

相変わらず素っ気ない。

でも、昨日の余計な質問で距離が広がっちゃったかと思ってたけど、別にそうではなさそうだった。

「美結、お待たせ」

栞那ちゃんの後ろ姿を見ていたら、美愛が横から声を掛けてきた。

「うん」

「じゃ、行こっか」

「うん」

答えたころ、栞那ちゃんはちょうど角を曲がった。

美愛と一緒に部屋に戻った。

ヒデくんはいなくて、健ちゃんだけだった。

「美結、うれしいことでもあったのか？」

「え？」

健ちゃんが言うので

「どうして？」

訊き返す。

「いや、別に、何となくだけど」

「ふーん」

「美結はいつもそんな感じだな」

「え？」

「いや、それでいいよ、美結はそれでいい」

「...」

別に健ちゃんだって、今まで変わってない。

だから安心できる。

私は健ちゃんに安心してもらう何かはできないけど...

「そうだねー，あたしも美結はそれでいいと思うよ」

「何なの，美愛まで」

「いやいや」

笑いながら美愛が手を振る。

健ちゃんだけじゃない。

美愛だって，ヒデくんだって，やっぱりこんな所に来てからでも変わらない。

スゴク安心できる。

健ちゃんに対してもだけど，私はヒデくんにも美愛にも何もしてあげれないのに，もらってるものはいっぱいある。

「美結がふさぎ込んでしまったら，あたしどうすればいいのか分かんないもん」

「ええー，何それ」

美愛に突っかかる。

自分としては，不満そうな顔をしてるつもり。

「だいたい毎日，美結から元気をちょこっともらって過ごしてる」

「え？」

「あたしの元気の何分の一かは，いつも美結からもらった元気だった」

また笑ってごまかすのかと思ってたのに美愛は結構まじめな顔してる。

「こんなところにいたら，余計そうだよ」

「美愛...」

「今は半分，いやもっともっとかな，美結にもらった元気って」

そう言ってから美愛は初めて笑った。

「あたしは美結がいないとやってけないな」

「そんなの私だってそうだよ」

ちょっと強めのつもりで美愛に言う。

「違うよ」

でも，美愛は，かえってまたまじめな顔に戻ってしまう。

「違うよ。あたしは美結みたく誰とでも打ち解けれない」

「え」

「クラスで友達っていったら美結しかいないよ」

「.....」

(そうかな...)

何かもう遠い遠い昔みたいな、つい最近のことを思い出してみる。

美愛はポツンと独りでいたりしてなかったし、私が誰かとしゃべってるときに一緒に話に入っていたりしてたはず。

「美愛は結構いろんな人としゃべったりしてたじゃない」

思ったままのことを美愛に伝える。

「全然打ち解けてるように見えてたけど」

「違うよ」

小さく頭を振る。

「美結がいたからだよ」

「私が？」

「そう」

コクンとうなずいて

「あたし、美結がいなくてこじゃ誰かとしゃべったりしてなかったから」

「...」

私が見てないところで美愛がどうだったかなんて判るはずないから、答えれない。

美愛がフーツと音を立ててため息をつく。

「今年のクラスの中じゃ、美結がいなけりゃやってけないよ、あたしは」

「うん、分かった。それでいいよ、もう」

私が笑いかけると、美愛もいつものようにして笑ってくれた。

「...美結といないと」

美愛は笑顔はそのままにして

「ろくでもない話が来るしね」

結構大きめの声で言った。

「え？」

「大丈夫大丈夫」

美愛の表情は変わらない。

「美結といれば、独りじゃないもん、大丈夫だよ」

当たり前のことが法律になって良かった。

って言っても、今までだって変なことを押しつける法律なんて別になかったけど、当たり前のことをわざわざ決めてくれれば、つい間違っって破っちまうこともないだろうからいい。

「あーあ、こんなんでもいいのかあ？」

でも、何でだか不満そうなのもいる。

俺に向かって言ってるって、さすがに気付いたから

「何だよ，星」

面倒だけど答える。

「だってさ」

星は頭を左右に振りながら

「今日の千賀だって考えて動いてるようじゃないよな？」

語尾をスゴい上げた。

（ホント，面倒だ）

「なんで？」

「いつまでもみんな仲良しなんて，そんなときか，もう？」

「あ？」

俺は別に星が好きでも嫌いでもない。

星には同じクラスの奴ってこと以外の気持ちを持ってない。

知らない奴じゃないけど，友達かって訊かれたら正直首を振る。

なのに何かいつも偉そうだからカチンとくることが結構ある。

「何が言いたいんだ？」

「ちゃんと考えてないと死んだ奴らみたくなるってことだって」

「死んだ奴ら，ね」

星と同じで，今までに死んでしまった4人と俺は友達とかじゃなくて，ただの同じクラスだった。

なんか悪いことしたわけでもないのに死んでしまったことは，かわいそうだと思う。

でもきっと，星はそんなふうに思わないんだ。

だからそんな言い方ができる。

「あの4人が何も考えてなかったなんて分かるのか？」

言ってしまうってから

（失敗した！）

と思ったけど

「何も考えてなかったに決まってんだろ」

星は鼻息の音がするくらいの調子で言い切った。

「...」

（勝手な思い込みか）

（まあ，俺にムカつなかったのはラッキーだけど）

星はまだ俺にムカついてなくたって，俺はなんだかムカムカしてきてる。

これ以上こうしていると星にもっと余計なことを言いそうだ。

星はたぶん，自分は何でもお見通しだって信じてるタイプの奴だろうから，こんなストレスの高いことさせられてるうち思い込みが余計ひどくなったのかもしれない。

変に機嫌を損ねると，俺が損する。

たかが星でも敵に回さないに越したことない。

「そうだな、星みたく考えておくのがいいだろうな」

俺は食いかけの皿を持ち上げて席を立った。

「ああ」

星は満足げにニヤツとした。

(何も考えてないのは、お前自身だって)

でも、案外こういう奴の方が今みたいな状況の中では幸せなのかもしれない。

「……」

ホントはさっさとシャワーを浴びたいんだけど、こっからは遠い。

それにまだ次がある。

「…」

当然だけど、こんなことに慣れれない。

(でも…)

もうこれしかないんだし、平気にならなきゃ。

今日の分が全部終わって、散らばってた服を集めて回る。

「あのさ」

イスに座ってあたし達を見てただけの森さんが口を開く。

「珠美佳あ、このままじゃヤバくない？」

「え？」

声を掛けられた三田さんが森さんを見るけど、

「っと、なにが？」

あたしと同じで、何のことか分かってないみたいだ。

「今日何日？」

「え？」

三田さんが端末を見る。

あたしも見る。

「…6日だけど」

「でしょ」

「うん」

「ヤバいよね？」

「…」

森さんに問い詰められてるのは三田さんだけど、答えられないみたいだし、次はあたしだろう

。

「ねえ，広魅，ヤバいよねえ？」

（やっぱり...）

「うん...」

森さんににらまれないように，うなずいてしまう。

「じゃ，どうしよっか？」

「え？」

「ヤバいままにしておけないでしょ？」

「.....」

森さんの言いたいことが分かってないんだから，どうするって訊かれても分かるわけがない。

「.....」

それは三田さんも同じ。

「もう6日なんだけど？」

言いながら森さんが三田さんに近付いていく。

「広魅」

と，急にあたしの方を見て

「あんたもちゃんと誰か誘ってんの？」

って言ったから，やっとな森さんの言いたいことが分かった。

「ああ，うん」

「あたしは，ちゃんとやってるよ」

三田さんがグツと右手を握りしめた。

「そ」

森さんが三田さんの肩をポンとたたいて

「頼んだよ，珠美佳」

「うん」

「今日中に誰か連れてくんだよね？」

「あ，うん」

三田さんがうなずくと，森さんがあたしを見た。

「あんたもだよ，広魅」と言われたような気がして，慌ててコクコクとうなずいた。

「お休み，」

「うん，お休み」

暗がりの中，すぐ近くから聞こえてきた理璃の声。

結局訊けなかった。

理璃には何となく昨日あたりから悩みっていうのかな、何か気になってることがあるように感じてた。

それが何か訊けないでいる。

ただ、私にも悩みがある。

悩みっていうんじゃないくて、理璃に隠してること、だろうか。

(スゴい勝手だけど)

理璃とあたしの隠してるのがホントは同じだったらどうだろう。

それは悲しいこと？

もしかしてあたしはそれが嬉しいの...

でも、とにかく理璃の役に立ちたい。

そんなふうに強く、思っではいるけど、切り出せない。

あたしには取り柄が何もない。

ほとんど全部が人並みだ。

そんな自分をイヤってほど知ってるから、昨日理璃に言われた「茉莉亜、一緒に頑張ろうね」っていう理璃の言葉にホントはドキドキしてしまった。

それが本気なら

(あたしは理璃の役に立てるかもしれないじゃない)

そんな気持ちになってしまった。

でも、理璃が何か気になったまま隠してるんじゃないかって気になるのは

「何でもないよー」

って笑って打ち消して欲しいってこともある。

あたしは弱い人間だ。

頭も運動も、何か一つくらいよくできることがあってもいいんじゃないかって、ずっと思ってる。

昨日から今日にかけて、あたしは一つ決断した。

それが今日の自分を守るために役立ったけど、あしたも自分を守ってくれる決断だったかどうか分からない。

あたしがここで危ない目に遭ったりしないのは、あたし以外のみんながあたしを守ってくれてるからだ。

理璃もその中の一人だし、他にもいろんな人がいる。

それ以外の何かじゃ絶対ない。

そんなあたしだから、いざ理璃から頼られてしまっても、実は理璃の役に立つため何もできないような気がする。

気持ちだけあっても、実際には何もできない。

結局本当は、自分を頼りにしてくれる人なんていて欲しくない、って思ってるのかもしれない。

だって、みんなに頼って生きるのは楽。

それに、もう、みんな解ってるはずだから。

助け合おうとしてるだけじゃない、誰かを蹴落とそうとしてる人がいて、実は自分一人を守ろうとするのだってできるかどうかって。

理璃があたしを頼ってきて、でもあたしは自分しか守れる状態じゃなかったらどうしよう。

あたしが理璃を頼って、でも理璃はあたしを守ってくれなかったらどうしよう。

理璃はあたしを、あたしを理璃を
(やっぱり、恨むのかな……)

寝返りをうつ。

急に今朝の健ちゃんの言葉を思い出した。

ミユ、ウレシイコトデモアッタノカ？

違う。

ここ何日も、うれしいことなんて全くない。

そう。

うれしいことなんて一つもない。

だから、今朝だってうれしいことはなかった。

昨日降ってた雨は、朝目が覚めたときには降ってなかった。

朝言われたとおり、もし健ちゃんにも判るくらい私が違ってたんだとすれば、まあ、そのことくらいだろう。

(それにしても…)

思わず謝っちゃうくらいだし、葉那ちゃんに昨日してしまったことは悪いことだったと思ってる。

悪いことをしてしまったと思っではいるけど、どこがどうしてどのくらい悪かったのかなんて分からない。

夜どこにいるのか訊いてみただけだった。

全然深い意味なんてなかった。

無意識に、不思議と思っていたことが口に出た。

栞那ちゃんの居場所をホントに知りたかったわけじゃない。

教えてもらえなくても、適当にごまかされても、それはそれで良かった。

しかも、私の心臓がギュツとなったのは、栞那ちゃんの表情が少しも変わらなかったから。

そうなんだ。

栞那ちゃんは怒っちゃったとか、全然そんなんじゃなかった。

全然なかったけど、でも、今まで一度だって、誰の目もあんなふうになったのを見たことない。

好き。

嫌い。

無視。

そんな視線は向けられたことがある。

だから、どんなものか知ってた。

栞那ちゃんのは、私の知ってるどれとも違ってた。

視線が私に向いてるのに、私を通り抜けた向こう側だけを見てる。

私は空気みたいで、栞那ちゃんの目には私の何も映らなくなった。

そう感じた。

そう感じたせいで、息もできなかった。

そう感じただけで、胸が、グシャツとつぶれそうになったの...

裁きに因る死亡者

なし

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

26人

8月7日

賢くても今日死ぬんだったら
バカになって明日も生きよう

朝が来た。

そんなのずっと当たり前だった。

だから、逆にずっと、朝なんて来て欲しくない、って思ってた。

朝になったら、いろんなことしなくちゃいけない。

スゴく面倒だった。

ずっと夜が続いてれば何もしないで過ごせるのに、って思ったこともあった。

そうやって、ダラダラ過ぎてる毎日を特に何とも思ってたなかった。

でも今は違う。

朝が来ると、ホッとする。

今日も朝を迎えれたことに、とにかくホッとする。

誰か欠けなかったか、確かめるのは次だ。

(ここんところ、何もないけど...)

と思った瞬間、端末にメールが来た。

8月7日 @国王の法

～今日の法は【集会室で過ごす時は端末を身に付けておくこと】にします。 森～

「ふ～ん」

昨日決めた今日の国王は森さんだ。

「実際、端末はいつも持ってるんだし、普通にしていれば平気だね」

来た途端メールを開いた茉莉亜が言うので

「そうだね」

頷く。

「私のって黄色だけど、茉莉亜のは赤なんだね」

「あ、なに？端末のこと？」

「うん」

「一人ひとり違うのかな？」

「そんなことないんじゃない」

「そうなの？」

「安齊さんとスズミナが、同じだねーなんて話してるの聞いたし」

「へえー、双子同士の色は違うのに、スズミナと美結ちゃんとは同じ色なんだ」

茉莉亜と話していると楽しい。

茉莉亜の方がどう思ってるか判らないけど、訊くのはちょっと怖い。

「それにしても、昨日の理璃のとか今日の森さんのとか、何でもないことを法律にしていれば、誰

も欠けたりしないんだけど」

「...」

溜息交じりに言うくらいだから、茉莉亜はホントにそう思ってるのかもしれない。

「でも」

言いかけて、慌てて口をつぐむ。

「でも？」

「あ、っと...」

「理璃、何？」

茉莉亜に何か答えなければ収まりそうにないと思ったので

「何でもないことって、かえって思い付かないよね」

苦笑いを浮かべたつもりで言う。

「すぐネタがなくなっちゃいそう」

苦笑いを続けたつもり。

「うん、そうだね」

茉莉亜も苦笑いみたいなのを浮かべたので、一応は成功したようだ。

もちろん、さっき本当に思ったことは全然違う。

とても守れそうもない難しいこと、私じゃ考えつきそうもない変わったこと、目的の解らない不思議なこと、そんなのを決めた法律はなかった。

でも、実際には最初の日からもう、二人が違反してしまった。

(案外、現実には茉莉亜の言ってたことの真逆じゃないかなあ...)

お昼ご飯を食べ終わって、食堂の前で何となく立ってたら

(ん?)

向こう側から栞那ちゃんが歩いてくる。

私達の隣のテーブルで独りだったけど、さっきまで食堂にいて、いつもどおり食べ終わるとフツと立ち去ってしまった栞那ちゃん。

昨日までだと、そんな感じでいなくなった栞那ちゃんとは、次のご飯のときか、集会室に集まる時間じゃなければ、また会ったりできなかった。

「栞那ちゃん」

軽く手を上げて声を掛けてみる。

別に返事はなかったけど、全然変わらない表情、早さで私に向かって来る。

「あれ？」

栞那ちゃんがすぐ近くまで来たから初めて判ったけど、髪が濡れてるみたい。

「シャワー浴びたの？」

「...」

言葉はなく、うなずいた。

「へえ」

栞那ちゃんの金髪、濡れてるところを見るのは初めて。

「栞那ちゃんの髪は、濡れるとちょっとだけウェーブが強くなるんだね」

いつもなら超ゆるいウェーブがかかってて、フワーツとしてる金髪が、今は少し曲がりが強くなって、背中で拵がってる。

「...そうかな」

「うん」

大きく首を動かす。

「...」

でも、栞那ちゃんは、私のこと見てくれてるみたいだけど、何の反応もない。

「...っと、ゴメンね、呼び止めちゃって」

「...」

「何かすること、あるんだよね、たぶん」

言いながら、たぶんヘラヘラとした笑みを浮かべてるはずの私。

自分でもイヤになる。

だけど、私にしてみれば、相手の機嫌を取るみたいなことしか、こんな空気の時できることがないのだった。

ずっとそうだった...

「今は一人？」

「え？」

意外。

私から視線を逸らさないで栞那ちゃんに訊かれ

「あ、うん」

慌てて何回も首を動かしてうなずく。

「でも、ちょっと先に出てきただけで、すぐに美愛が来るはずだから」

誰かと一緒じゃなかったことを栞那ちゃんが気にしてるのかと思ったので、そう言うと

「いつも視界に誰か入れておく」

唇だけが動いて、他は何も動かさない栞那ちゃん。

「ああ、うん」

「このあと、荷物は全て点検してから常に持ち歩く」

そう言った栞那ちゃんが突然身体の向きを変えた。

「え？」

そして、歩いて行ってしまった。

「んー……」

栗那ちゃんが言ってたことは2つ。

いつも視界に誰かっていうのは、誰もいない所で独りになっちゃいけないってことだと判る。

でも、荷物全部持ち歩くって、なんで？

まあ、今私はポーチしか持って歩いてなくて、バッグとかはみんな夜過ごしてる部屋に置いてある。

点検っていうのも、あまりに意味不明。

(だいたいにして…)

私には独りなるななんて言うくせに、いつだって自分は独りでいるし、さっきだって、バッグ、ポーチどころか、栗那ちゃんは手ぶらだった。

自分は私と違うって思うの？

他の人にはしない注意を私にはしなくっちゃとか思ってるの？

「美結、ごめーん、結構待ったでしょ？」

ちょっと考え込んでしまいそうだったけど、ちょうど美愛が来た。

「いや、少しだよ」

「そう？」

「そう」

さっき栗那ちゃんにしたみたくヘラッと笑わないのは、美愛にはそんなことしなくても大丈夫だからだ。

「今日はすごい暑いよねー」

美愛は、えり元を動かして風を入れるみたいにしてるので

「うん、そうかも」

同じように私もやった。

「でも、ここってある意味便利だよ」

「え？」

「だって、基本何しても自由だし、ご飯も好きなときに食べれるし」

「んん、まあねえ」

「第一」

美愛は、すそから風を入れ始めながら

「シャワーだって浴び放題、着替えもし放題、だもの」

おかしように笑った。

「はあー……」

こないだ美愛は『美結から元気をもらってる』って言ってたけど、元気をもらってるのは私の方だ。

「そうかもしれないけどさあ」

作り笑いじゃない笑みが浮かんできた。

「なに？」

でも、帰ってきた美愛の笑顔を見たら、言おうとしたことを引っ込めたくなくなった。

「自由に過ごせるって言っても、やることないしね」

「うん、まあ、確かに」

美愛が二、三度うなずく。

「あ、そうそう、美愛」

「なに？」

「さっき榮川さんに言われたんだけど、一回部屋戻って荷物の確認してみようよ」

「え？なんでそれ？」

美愛の笑顔が不思議そうな表情に変わる。

当たり前のことのはず。

私だって何でだか分からないんだ。

だから

「なにして、っと...」

美愛に何も答えられない。

「別に損するわけでもなさそうだしさ、そういうのなら何でもやってみようかと思って」

「ふーん」

美愛の顔は変わらない。

「それにほら、基本ヒマでしょ、ここにいると」

「まあ、それはそうだけど、何だか分からないこととしてまでヒマつぶしたくないなあ」

「.....」

美愛と私は違う。

私は周りに合わせるばかりで自分ってものがないから、美愛みたいな強さがうらやましい。

「取りあえず、私、部屋戻ってるね」

「うん」

美愛がそのまま私といっしょに来てくれないか、振り返らないで必死に気配を読んだけど、部屋に着いてみるとやっぱり美愛は来てなかった。

「なんだ、安齊、どうかしたのか？」

部屋の中に三浦くんがいて声を掛けてきた。

「ああ、うん、ちょっと」

健ちゃんとヒデくんもいたので、少しホッとしながら中に入る。

「美結、ずっと昼食ってたのか？」

座るよりも前に健ちゃんが言ってきた。

「うん」

座る。

「何だか長いな」

今度はヒデくんだ。

「うん、ちょっと話してたりしたから」

「とにかく女の話ってのは長いからな」

「うん...」

三浦くんは、思ったことが口に出るんだろう、不安を感じさせる人じゃないからいいんだけど、少しデリカシーみたいのがあってもいいかもしれない。

「じゃ、オレは」

三浦くんが立ち上がる。

「ああ、頼んだぞ」

「分かった」

ヒデくんに向かって軽く手を上げながら、三浦くんは行ってしまった。

「何の話してたの？」

「え？」

ヒデくんに訊いたつもりだったのに、健ちゃんが反応した。

「そうだな...」

そしてヒデくんをチラッと見る。

「見回りみたいなことを頼んだんだ」

私を見てヒデくんが言うと

「ああ、そう、そうなんだよ」

「見回り？」

「最近、何もないとはいっても、分からないからな」

「そっか」

ヒデくんも健ちゃんもちょうど冷静にいろいろ考えてみたいだ。

だから、私も栞那ちゃんの言葉を伝えないといけない。

「それでね、ヒデくん」

「なんだよ、マジメそうな顔して」

「うん、バッグとか一応調べたりしたいの」

「バッグを調べたい？なんでだ？」

「あ、いや...」

また口ごもってしまいそうになるけど

「食堂で女子同士話してるときに、一応いろんなもの調べ直した方がいいかなってことだったから」

美愛のときみたいに、お互い不思議なまま話を終わらせたくないの、自分も納得させるような感じの話を作ってしまった。

「持ち物を調べるか...」

首を二、三度振りながら考え込むヒデくん。

「まあ、別にヒドい手間でもないから、やってみてもいいかもしれないな」

健ちゃんはすぐに賛成してくれた。

「...そうだな、自分の持ち物を調べる分には危ないことなんてないしな」

ヒデくんはさっそく自分のリュックを引き寄せた。

私のバッグも、健ちゃんのもヒデくんのにもなんにも変わったところはない。

「ここにいない奴のは、見かけたたび言ってみよう」

「うん」

「さっき美結が言ってた、持って歩くっていうのは結構面倒だけど、すごい重いわけじゃないから、やってみるか健蔵」

「しょうがないな、自分のだしな」

肩をすくめる健ちゃん。

「いくら健蔵とか美結のだって、俺が持つわけにいかないだろ」

ヒデくんが言うと、健ちゃんはますます肩を落としながら

「まあなあ」

と言ってから、ちょっとだけ苦笑いみたいに続けた。

「変なふうに触ると、昨日千賀が作ったのに引っかかったりするからな」

「え？」

その健ちゃんの言葉にハツとする。

(さすが栞那ちゃん...)

私は今の今まで、栞那ちゃんの言った意味を何も解ってなかった。

直接聞いたわけじゃない健ちゃんでも解ったっていうのに。

自分の物を自分で持ってる限り、千賀さんの法律には違反しない。

誰かを守ることに役立つんだ、これって！

「あれ？ここもあまりいないんだ」

「？」

後ろからの声で振り返ってみると、三田さんと矢口さんだった。

「ここも？」

「みんな同じようにヒマなんだろうけど、どこで何してるのか見て回ってたんだ」

「あ、そうなんだ」

私が三田さんと話し始めたのを見て、健ちゃんもヒデくんもリュックを肩に掛けて部屋を出て行

こうとする。

「...」

前から知ってたけど、ヒデくんと健ちゃんは、三田さんが苦手のようなから、わざわざ三田さんの後ろを歩いていく二人を呼び止めないで見送った。

「安齋さんは付いてなくていいの？」

「は？」

「行っちゃうみたいだよ、二人とも」

「ああ、うん」

バッグを肩に掛ける。

「じゃ、またね」

「うん」

矢口さんと三田さんに持ち物調べたらって言うのは今じゃなくてもいいと思ったので、そのまま廊下に出た。

「わ！」

廊下に出た瞬間誰かとぶつかりそうになってしまった。

「ゴメンなさい」

「別に」

私の横をすり抜けて、森さんが部屋に入っていった。

何のことだから判らないけど、バッグ持って一緒に来てってことで中庭みたいな所まで付いてきた。

自分のブラシがなくなったって言われても困った。

私はシャワー室にいっぱいあったのを使ってるから、そうしたらと言ってみた。

引ったくられたバッグを逆さにされると、中身が地面の上に散らばった。

ブラシが一つ転がってるのを拾い上げて、これは誰のって言うから、見覚えあったし、私のバッグに入ってたんだから私のだって答えた。

名前が書いてあるなんて、思ってもいなかった。

私じゃない名前。

茉莉亜...

やっぱり、真逆だったよ.....

何でも...なさそ...なことが...あぶな.....

「なんだ？」

言われた場所に言われた時間に行ってみると、何でだか星と三浦がいた。

しかもお互いを指差して何か言い合ってる。

「お前まで、何なんだ内海」

イラつきMAXな感じで星が突っかかってきたけど、それを言いたいのは俺の方だし、三浦もだろう。

二人は何を言い合ってるんだ？

「おい、内海、お前も何か俺のを持ってるんじゃないだろな？」

星が急に俺の方に向かってきた。

「なに？」

「オレのバッグに星のボールペンが入っててさ」

「ボールペンじゃない、万年筆だ」

「でも、星はオレのスプレーを使ってやがって」

「はあ？名前も書いてないのに、お前のだなんてどうやって判るんだ？」

星が三浦にまた突っ掛かり始めた。

正直どうでもいい。

俺には、こいつらの争いなんてどうでもいいけど、言われた時間に言われた場所に来て、これじゃ困るんだ。

「？」

ガラス戸が閉まる音で振り向いた。

（あ！）

やっぱり思ったとおり、この感じじゃ入りにくかったんだろう、引き返していくのが見えた。

「あ、おい、ちょっと待て」

俺が戸に駆け寄ろうとすると、「バ」だか「ボ」だか何だか変な声が聞こえた。

そっちにまた振り向くと、その瞬間星の腹から何かが飛び出した。

後ろに倒れる星。

「...んで、オ...」

今度は星の体が少し持ち上がる。

背中？

「うあああああ！！」

すごい声を出しながら俺というよりドアに向かって突っ込んでくる三浦の伸ばしてる右手が吹っ飛んだ。

ベチャツとした感じの物が俺の顔にぶつかってきた。

ヌラツとした何かが顔を滑っていく。

血...

傷？

フラッシュみたく浮かんたら、バランスが崩れて左に倒れてしまった。

星にだけは、ずっとムカついてた。
三浦とは何のからみもなかったな。
おとといか...
あのときも思ったけど、何で俺なんだ...
星も三浦もだったけど、俺も同じだ
どうして3回なんだろう？

7時になった。
空いてる席は9。
昨日は確か4。
ってことは、今日たぶん...

「美結は座ってろ！」
「ん...」
健ちゃんの声は聞こえる。
走って行くヒデくんの背中も見える。
でも、夢なのかもしれない。
ここ来る前に一緒にバッグ調べてた...
集会終わったら、一緒にご飯食べようって約束した...
トイレに寄ってから行くって言ったから、私が集会室に先来てただけ。
なのに、美愛は隣にいない.....

「.....」
もう何年も前みたいな今日昼過ぎのことを思い出す。

「...ホントに？」
おびえたような目で矢口が言うと
「なに言ってんの」
珠美佳が代わりに答えた。
「...」

「みんな何考えてるか判らないんだから、ボーツとしてていいの？」
「.....」

うなだれてしまった矢口。

分からなかった。

『他人が生きるため 自分は死ぬ』

そんなのは絶対イヤ。

じゃあ、逆は？

『自分が生きるため 他人は死ぬ』

「やっぱり、それもイヤ」なんて人もたまにはいるかもしれない。

けど、気は進まなくても、誰かの他の人の犠牲で自分が生きれるなら、それはそれでいいって考えるのが普通じゃないかな。

あたしもそうだった。

だからたぶん、矢口もそうだったはず。

でも、みんな分かってる。

ホントは、もう一つある。

3つ目の答えがあるって。

世の中に、3つ目の答えを出す人がいて、それが同じクラスにいたのを知ったのは、こんなことになってからだ。

こんなことにならなけりゃ、3つ目の答えも、それを出す人も、遠い国とかテレビとか新聞とかネットの世界の中だけの存在だったはず。

珠美佳の口を借りて悪魔の声が聞こえる気がしてくる。

3つ目の答え...

イキルタメ ミンナコロス

珠美佳がこっちに向かって歩いてきて、丁度わたしの横に来たところで脚を停めた。

そして口を開く。

「バカは死ななきゃってゆーけど」

「...」

「死んじやったら治ったかどうか分かんないねえ」

「...」

「ま、あんたバカじゃないもんねえ」

先に行った人達を追いかけるみたいにして、わたしの横から行ってしまった。

「...」

男子のことは判らない。

でも、理璃と柚島さんのことは判る。

二人とも、たぶんわたしと同じだったはず。
もちろん、今ごろ判ったって遅い。
わたしと二人に、差なんてあったのかな？
二人と支え合うことはできなかったの？
そして...

「逆さま？」
ポツツと出た自分の声にビックリする。
そうだ。
いつのまにか、逆さまになってる。
とんでもない人達に命を握られてしまってた。
ぼんやり今日までいたわけじゃない。
ちゃんと注意して過ごしてたつもり。
でも...
とんでもない人達に命を握られてしまってた。

(なにがバカで、バカじゃないんだろ……)
(気が付いたら命を握られてたわたしは、バカなの？)
(わたしの命を握ったみたいな人達は、バカじゃないの？)
(昨日までの人達も、今日の人達も、バカだったの？)
自分に訊くのが停まらない。

わたしがまだ生きてるのは、バカじゃないから？

裁きに因る死亡者

千賀 理璃
星 佑太郎
三浦 克哉
内海 芳毅
柚島 美愛

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

2 1 人

8月8日

「希望」という恐ろしい災厄が
最後までパンドラに残ってた

踏切のようなけたたましい音で目が覚める。

「...」

耳元に置いてしまった端末を手にとって見ると、メールが届いてて、題名は“@ 8月7日”。

@ 8月7日

～裁きによる死亡者 内海芳毅 千賀理璃 星佑太郎 三浦克哉 柚島美愛

裁きに因らない死亡者 なし

国家の人口 21人～

「...」

正直、何も思い付かない。

もうとっくに知ってたことだし、この一晩で完全に何かが壊れた。

他にも端末眺めている奴はいても、いちいち反応してるような奴はいない。

壊れたのは、みんな同じかもしれなかった。

いや、それも違うか。

壊れてる奴は、ずっと壊れてたんだ。

大体、ちょっとしたことで俺は勘違いしてた。

ほんの二、三日誰も死ななかつただけで、なんか安心してたんじゃないか？

壊れてしまった奴は、ずっと壊れたまま、ずっとチャンスを狙ってたただけだったのに。

俺は、それに気付かなかった。

気付いていたら、どうだっただろう。

俺に何かできたか？

さかのぼって何かできたどうかは、昨日からずっと考えてきた。

でも、まだ答えが見えない。

(このままじゃ、馬鹿な奴らから)

「あいつを守れない...」

自分が幽霊にでもなったみたいに力が入らない。

健ちゃんとヒデくんが付いててもらいながらトイレまで来て、さすがに中まで一緒にいてもらうわけにもいけないので、入口で待っててもらってる。

「.....」

鏡で自分の顔を見る。

昨日まで、私の映った鏡には、いつも二つ顔が映ってた。

ずっと映ってた。

「...」

今日はヒドい顔が一つだけ。

パッと見で判る，しおれた顔。

自分なのに，自分の顔じゃないみたいだ。

「！」

音もなく急に金色の風が鏡に映った。

「おはよう，美結さん」

振り返ってみると，栞那ちゃんだ。

もちろん，鏡に映った風は，金髪がなびいただけ。

「おはよう，栞那ちゃん」

栞那ちゃんは，今日も挨拶してくれた。

これは，昨日とも，おとといとも同じかも。

私は笑顔で返したつもりだったし，栞那ちゃんの表情は，やっぱり動かないけど，いつもどおり。

栞那ちゃんは，ちょっとトイレの奥までのぞくみたいな目線になってから私に向き直って

「美結さんは大丈夫？」

静かな声で言う。

「え？」

栞那ちゃんが「大丈夫？」なんて訊いてきたのは初めてだったので，少し，ううん，かなりビックリした。

「っと，どうして？」

でも，何が大丈夫と訊かれてるのか分からない。

「今朝は誰もが酷い顔」

「え？」

「昨日大勢裁かれたが，美結さんは大丈夫？」

「あ...」

確かに昨日のことがショックでないはずない。

5人も裁かれてしまった。

何より，あの美愛がいなくなってしまった...

おとといまでの4人。

美愛。

昨日の美愛以外の4人。

ショックのレベルに違いがあったらホントはいけないんだろうけど，失ったものの大きさからすれば，申し訳ないけど美愛を他の8人と比べるってのはできない。

「うん、あまり寝れてないけど、大丈夫だよ」

そんなの、嘘。

大丈夫だけど、少しも寝れなかった...

確かに、最初の日もほとんど眠れなかったけど、段々普通に寝れるようになった。

でも、昨日から今朝まで、1秒も寝てない。

ここ3年の美愛との思い出が次々次々あふれてきて、その一つ一つが涙になって……

明け方くらいだったはず。

別な気持ちも起こってきた。

どんな違反だって、誰も告発しないでいれば裁かれない。

ヒデくんが言ってたとおり。

私達の中で潰し合いが起きてる。

私の胸の中にも、闇みたいな気持ちがサアーツと速く広がっていくみたいな気がした。

「そう」

葉那ちゃんはゆっくりと入口の方を振り返って

「美結さん自身が辛いのが、私にも判る」

と言ってから

「とても判るけれど」

沈んでいく私の視線を拾い上げるみたいに顔を傾けて

「でも、酷そうな人には声をかけてもらえるといい」

と続けた。

ピクッと跳ね上がるみたいに顔を上げる。

「私ではなく、美結さんがいい」

「え？」

大きな青い瞳が私をのぞき込んできた。

瞳に誘われる。

「あ、うん、そうする」

答えた。

「うん」

すぐもう一回うなずいた。

確かに葉那ちゃんよりは、私に向いてる仕事だろう。

普段だって今だって、お世辞にもクラスメートとうまくやれてるとはいえない葉那ちゃん。

そんな葉那ちゃんが私やクラスメートを心配したりしてくれるのだと知って、ほんのわずか明

る気持ちになった。

「でも、私に言われてということは内緒にして欲しい」

「そうなの？」

私としては、栞那ちゃんに対するみんな見方を変えてあげた方がいいと思ったけど

「美結さんが自分の考えで声を掛けていているというのが大事」

と言われてしまったので

「うん、分かった」

栞那ちゃんの言うとおりにすることにした。

「...」

来たときみたいに何の音もなくトイレから出て行く栞那ちゃん。

実際そんなはずないって解ってても、あの雨の日からは冷たいガラスみたいに見えてた青い瞳。

今スゴクあったかく感じたが気がする。

栞那ちゃんに続いてトイレを出る。

ちゃんとヒデくんが待ってた。

「健ちゃんは？」

「そっちだ」

ヒデくんが目線で隣のトイレを指した。

「そっか」

健ちゃんもトイレに入ってたみたいだ。

「行くぞ」

「え？健ちゃんは？」

「待ってなくていいって自分で言ってたから大丈夫だ」

「そうなんだ」

ヒデくんの真横に付いて歩き始める。

私を独りにできないってことで一緒にいてくれる。

健ちゃんは独りでも大丈夫ってことなんだろう。

「美結」

「なに？」

「さっきトイレで榮川と一緒にになったよな」

「うん」

「その...なんだ...」

「ん？」

迷ってるみたいなヒデくん。

「ふつうにあいさつしただけだよ」

たぶん、栞那ちゃんと会ったときどうだったか聞きたいんだろうと思ったので、さっきのことを教えてあげる。

でも、栞那ちゃんが黙ってて欲しいって言ってたから、栞那ちゃんに頼まれたことは教えないつもり。

「あいさつか」

「うん」

栞那ちゃんは私と話したけどトイレは使わなかったっていうのが本当のことだけど、ヒデくんからすれば、入ってから少しして出てきた栞那ちゃんしか見てないから、私とあいさつだけしてトイレを使って出てったってことでも変には思わないだろう。

「女しかいないからって気を抜くなよ」

「うん」

「中まで行けないからな」

「うん」

集会室に着く。

ここで待ってれば健ちゃんもそのうち来るんだって。

「健蔵が来たら食堂に行こう」

「うん」

うなずいたけど、全然お腹なんて空いてない。

相変わらず幽霊になってるみたいな力入らない感じは同じだった。

「そういえば」

「なに？」

「まあ、俺達にしてみれば昨日は美結に言われて荷物調べたよな」

「うん」

「美結は、どうして荷物調べてみようなんて思ったんだ？」

「え？」

ヒデくんの訊き方は、そんな詰め寄る感じじゃなかったけど、ホントに知りたい感じではあった。

「...」

だからちょっと考えてみる。

荷物を調べるのは、私の考えじゃない。

栞那ちゃんに言われたことだ。

（言っているの？）

栞那ちゃんは、いろんなことに気付ける人なんだろう。

だからこそ、私にもいろいろ教えてくれる。

さっきトイレで口止めされたのは、その方がいいって栞那ちゃんが気付いてるからのはずだし
（逆にいえば）

昨日栞那ちゃんが私に口止めしなかったんだから、言ってダメなことではないのかもしれない。

「美結？」

「え？うん」

そう。

そのはずだ。

「っとね、栞那ちゃんが言ってたの」

「カンナチャン？」

なぜか不思議そうな顔をするヒデくん。

「それって、榮川のことか？」

「うん」

「榮川が、何て？」

「荷物調べてみなさいって」

「なに？」

「それで、その後は、ずっといつも持って歩きなさいって」

「なんだって？」

ちょっとビクッとするような言い方をされた。

「美結、そうなのか？」

「え？」

急にヒデくんの口調が変わってしまった。

「っと、なにが？」

だから、身体ごと向き直って訊き返すと

「だから、美結が昨日バッグ調べようとか言ってたのは、榮川に言われたからか？」

ヒデくんは、私をジーッと見ながら言った。

「うん」

本当のことだったし

（今ヒデくんに、そう言ったじゃない）

と思ったから、私は簡単にうなずいた。

「...」

ヒデくんは私を見つめたまま。

「どうしたの？なんか気になることあるんだったら言ってよ」

「...」

でも、ヒデくんは答えない。

スゴくバカってわけじゃないはずだけど、別に頭いいわけでもない私だと、まださっぱり気付かない何か。

その何かに、ヒデくんは気付いたのかもしれない。

でも、私に教えてくれないのは、私をどう思ってるからだろう。

どうして葉那ちゃんに言われたってことでそんなビックリするの。

どうしてそんな目で私を見るの...

「英基」

「え？」

右の方からの声で、そっちを向く。

中岡くん。

「ここにいたのか」

「ああ」

ヒデくんに声をかけたはずの中岡くんは、なぜか少し離れた所に座った。

そして、リュックを下ろす。

(.....)

スゴくちょっとしたことなんだけど、何か落ち込む。

昨日から、みんなそれぞれが自分の荷物を持って歩かなくちゃいけなくなってしまうてるんだもの。

「これか？」

私が見てたことに気付いた中岡くんが

「昨日の千賀のことがあるからな」

リュックをポンとたたいた。

「ホント肌身離さず持って歩かないと」

「...」

中岡くんの言葉を聞くと思わずひざの上に載せてたバッグをお腹に抱きしめてしまう。

「なあ、英基」

「なんだ？」

「英基がどう思ってるかはともかく」

腕を組んだ。

「...」

せいぜい何秒かだったんだろうけど、なんか重苦しい沈黙の後に中岡くんは

「千賀は、きっと素直な気持ちで法を作ったはずだった」
言ってから、ほどいた両腕でバーンと強く机をたたいた。

「俺だったら、他人の物を盗るなどか、盗むなどか言うだろうけど、千賀はそんな言葉使わなかった」

もう一度たたく

「それを利用した奴のせいで、千賀は！」

また、たたく。

「……」

中岡くんがたたいた机には、いつも千賀さんがいた。

いつからか、みんな決まったところに座るようになってた。

ほんのちょっとした取り替えとかはあるけど、大体同じ席。

ここもずっと千賀さんの場所だった。

でも、今日からは誰も座らない…

そんなのが、もう9つになった。

「大翔、訊いていいか？」

いつのまにか中岡くんの隣にはヒデくんが移動してた。

「今の話からすると、誰が何に違反したかが判るのか？」

「ああ」

ヒデくんの質問に、中岡くんはあっさりうなずいた。

「どうやって？」

「端末の機能にあったのを見つけたんだ、ホントたまたまだけどな」

「そうなのか？」

ヒデくんは驚いた顔をして

「俺にも教えてくれよ、その機能の出し方を」

つかんだ中岡くんの左肩を揺らした。

「ああ」

中岡くんはポケットから自分の黒い端末を出した。

「…出たか？」

「出た」

中岡くんが言うとおりに、ヒデくんと一緒に私も自分の端末を操作してみた。

画面には『違反者』という表示が出てる。

「そこから入ると、名前が映って、名前に触ると…」

中岡くんが教えてくれる前に、私はもう美愛の名前を探して、次の画面に移ってしまってた。

「……………」

私も訊かなかったけど、ヒデくんも健ちゃんも教えてくれなかった美愛が裁かれた理由。
最初の日を決まった最初の法律。

佐藤さんと根津さんと同じ理由。

(ってことは…)

頭が真っ白になってしまってた、昨日の夜7時、あの瞬間。

あの瞬間だったら、まだ美愛は生きてたんだ。

「柚島以外の4人は、4人とも同じなんだな」

「ああ」

ヒデくんと中岡くんの話を聞いて、美愛じゃない4人の画面を開けてみる。

(ホントだ…)

4人とも、千賀さんが昨日決めた法律に違反したことになってた。

「千賀を責めるつもりなんてない。でも、盗むって言葉を使わなかったのは」

「間違いだったよな」

ヒデくんの言葉にかぶせるみたいに中岡くんが続けた。

「ああ…」

ヒデくんは、ため息をつくみたいに言って天井を見た。

なぜか、そんなヒデくんを見ながら中岡くんが大きなため息をつく。

「…なあ、英基」

「ん？」

中岡くんが、もう一度ため息をつく。

でも、すぐ何か心が決まったみたいな顔をしながら

「昨日の英基もヒドい間違いだったよな？」

と言ったので

「なに？」

ヒデくんの表情がサッと変わった。

「おい、俺の何を言ってるんだ？」

一応抑えてるつもりかもしれないけど、ムカついてるのが丸わかりなヒデくん。

「…」

ヒデくんじゃない、ちょっと外れた辺りを見てるみたいな感じの中岡くん。

「大翔！」

イラッとした声。

そのとき、フッと中岡くんが私を見た。

「安齊がいるとちょっと」

「あ…」

(そういうことってあるかも)

「うん、私」

廊下に出ようとしたら、強い口調でヒデくんが

「誰も一緒に行ってやれないから、美結一人で外に出せない」

と言うので

「...」

立ち止まる。

だって、確かに怖い。

クラスメートしかいないのに、独りでいるのは怖い。

中岡くんが不満そうに首を振る。

「もういい」

で、私がいっても、もう話しちゃうみたいだ。

「集会室にいないことが問題だったのは、柚島だけだった」

(あ...)

美愛のことを話すんだ。

中岡くんが私にいて欲しくなかった訳が一瞬で解った。

「ああ、それが何だ？」

ヒデくんの言葉は、まだまだトゲトゲだ。

「英基は健蔵と一緒に飛び出していったよな」

「ああ」

「何でだ？」

(え?)

どうしてそんなこと訊くんだろうと思った。

それはヒデくんも同じみたいで

「何が言いたいんだ？」

中岡くんに詰め寄る。

「まだ自分の間違いに気付かないのか？」

「だから！」

またチラッと私を見る中岡くん。

「ホントに必要なだったのは、一人も部屋から出さないで、誰も端末に触らせないことだったよな？」

「なに？」

「英基達が飛び出していったせいで、他の奴らも部屋を出ていった」

「...」

「出ていった奴らが、そのあと何してたのか、全部判るか、英基は」

ヒデくんほどじゃないけど、中岡くんの声も大きくなっていた。

ヒデくんは黙って首を振った。

中岡くんは

「俺も知らない」

下を向いて言ったあと

「俺も知らないが、柚島が裁かれたんだから、誰かがやりやがったんだぞ」

ヒデくんを真っ直ぐ見て言った。

「...」

「自分が間違っただけで解るよな？」

「俺は」

英基がチラッと安齊を見た。

「俺は間違っていない」

「なに？」

自分でも判るくらい声がうわずる。

まさか否定するはずないと思ってた英基の答え。

ただ、安齊も意外だったようで、ビククリしたようにヒュッと音を立てて息を吸った。

「美結」

チラッとではなく、はっきりそっちをみてから安齊に声を掛ける英基。

「え？」

「健蔵が来たから、健蔵と先に食堂行ってくれないか」

「あ、うん」

安齊と英基の視線が俺の向こう側に行ってるみたいだったから、振り返ると、確かに健蔵が廊下をこっちに向かってくるのが見えた。

健蔵と一緒に安齊も危なくはないはずだ。

安齊と健蔵が行ってしまうと、英基の方から俺に近寄ってきた。

俺のすぐ隣に座り直して

「悪かったな、さっきは」

と言う。

「なに？」

「大翔がさっき言ったことは、俺も昨日の夜からずっと考えてる」

「...」

俺をまっすぐ見てくる。

「直接じゃなくたって、柚島を殺したのは俺なんだろうって」

「いや、俺だって、そこまでは言っていない」

慌てて首を振る。

「いや、俺はそう思ってる。」

大してふざけたりしない奴だが、こんな真剣そうな英基ほとんど見たことがない。

「さっき美結を追い払ったのは、美結には聞かせたくなかったからで...」

ギッと歯ぎしりの音がした。

「そうだよな...」

「じゃあ、どうすれば柚島を救うことができたのかって」

「...」

「まだ分からない...」

「俺だって分かんねえよ」

そうだ。

あれじゃ間違いだったのは解ってる。

でも、正解なんて...

「そうか」

「ああ」

「...」

何か言った方がいいのだろうか。

それも判らない。

二人して、どのくらい黙ったままだったんだろう。

「じゃあな、大翔」

そうだけ言って、英基が出て行った。

「...」

結局俺は何も言うことが見付からないままだった。

「それにしても、中岡くんも長谷田くんも」

「ん？」

「二人ともヒドいよね」

「んん？」

ヒデくんは知ってるんだろうけど、とぼけるつもりのようだ。

でも、私は言わずにいれなかった。

ヒデくんが間違ってるとは思えなかったから。

「ヒデくんは昨日間違ってたよ」

「そうか？」

「うん」

ヒデくんは、間違ってたか間違ってたか、長谷田くんとも中岡くんともめっちゃって、中岡くんとはケンカにならなかったって言ってたけど、長谷田くんとは私が見てる前でケンカになってしまった。

でも、しょうがない。

ヒデくんは間違ってた。

なのに、間違ってたって認めちゃうのは、それこそ間違ってる。

長谷田くんは、とても頭のいい人だ。

このヒドすぎる世界で生き抜く方法に気付いてないはずない。

「協力しないといけないんだもの」

「え？」

「長谷田くん、怒っていったけど、すぐまた仲直りできるよ」

「...」

「ね？」

「...だといいな」

「うん」

ヒデくんはムリヤリ笑いかける。

ヒデくんはヒデくんで、私に向かって細く笑った。

美愛を救えなかった。

美愛を救いたかった。

美愛を救って欲しかった。

体の一部が削り取られて、ごっそり何かいろんなものがなくなってしまったみたいだ。

美愛と私は、いつの頃からか、お互いにお互いの一部となっていた。

(だから...)

何もしないで見張り合ってるのが正しかったなんて思えるはずない。

もし、たとえ、それで良かったのだとしても、美愛のため走り出して行った健ちゃんとヒデくんが正しかったと思う。

「中岡」

英基と口論してから、昼飯の間もずっと黙りこくったままだった長谷田がやっと喋った。

「何だ？」

「俺、今いる部屋から移ろうと思ってる」

「なに？」

「同じ感じの部屋だけど、誰も使っていないのが1つあるんだ」

「そこに移るのか？」

「そう」

「……」

長谷田は冗談嫌いじゃないけど、こういうときにふざける奴ではないはずだ。

まあ、ふざけるタイミングの訳ないが。

「何か誰をどこまで信じていいのか、全然判んなくなっちまって」

「…」

「ホントもう判らない」

吐き捨てるみたいな言葉。

「何で」

「え？」

「何で、そんなこと俺に言うんだ？」

「中岡…」

いや、ホントは判ってる。

俺にそんなことを言う長谷田の気持ちは判ってる。

でも、俺も長谷田と同じだ。

俺も完全に狂ってきてるのかもしれない。

「俺と長谷田の考えが同じなら、俺は長谷田の提案に乗る」

「中岡」

「だから、何で俺に言ったのか教えてくれ」

「ああ」

長谷田は軽く頭を2、3回振ってから

「俺が中岡に言ったわけは」

俺の肩をつかむ。

「俺と一緒に別な部屋に移って欲しいからだ」

「俺と？」

「そうだ」

両肩をつかまれた。

「中岡とじゃなきゃダメだ」

「俺と二人でってことか？」

大きく頷く長谷田。

「ずっと考えてた」

「何を考えてた？」

「こんなとき誰と協力していくのか、ってことだ」

「それが俺なのか？」

「そうだ、中岡だ」

長谷田の手に力がこもる。

「でも」

「お、俺以外にもいるのか？」

「健蔵とも協力したい思ってた」

「英基もか？」

「英基か...」

俺の肩から手を離す長谷田。

「英基が今日ちゃんと自分の間違いを認めたら、英基にも声を掛けるつもりだった」

「やめたのか？」

「完全にやめたつもりはない」

俺から目線も離れた。

「英基のことは、もう少し考えてみる」

「そうか」

「健蔵は英基とセットじゃなきゃ、口説けないから、そっちももう少し考える」

「そうか」

大体は俺と同じだ。

ただ一つ違うのは、英基が自分の間違いをし過ぎるくらい後悔してるって長谷田が聞いてないことだ。

俺の時は、うまく安齊を連れ出せたが、長谷田と英基が口論したときは、ずっと安齊がいたから仕方ないが...

まあ、俺から聞かされるよりは、英基本人に言わせるのが一番いい。

まだ、このままにしておこう。

「分かったよ」

「ん？」

「取りあえず二人で部屋を移ろう」

「大翔」

俺の肩をまた両手でつかむ。

「ありがとう」

「いや、雄生、俺も大体同じようなこと考えてた」

「そうか、大翔もか」

「うん」

(今日は正しいことができた...か)

夜も8時を過ぎた。

昨日までより、人数が増えてる。

（昨日もだったから、あたしは今日休めるんじゃないかな）

なんてかなり期待してたから

「じゃ、みんなちゃんと仕事してね」

薄ら笑いを浮かべながら締めくくった珠美佳の言葉が信じれなかった。

「え？ちょっと待って」

思わず結構大きな声が出てしまった。

「は？」

行きかけた珠美佳が立ち止まる。

「なに？なんか文句でもある？」

にらんできた。

「でも...」

「文句あんの？」

口ごもることだって、珠美佳の前ではできなさそうだった。

「...」

黙って首を振る。

「文句言いたいなら言えば？」

「...ないよ」

「そう」

よく本とかで見かける、フフンという鼻にかかった笑い方の見本みたいな珠美佳の態度。

チラッと少し離れた所にいる前田さんを見る。

前田さんには、一人だけ仕事の割り当てがなかった。

でも、別に前田さんに反感があるわけじゃない。

あんなの突きつけられたら、ここにいることは、しょうがない。

あたしと違って、昨日までがんばってただけですごいと思う。

違う。

あたしとは。

違ってるはずだ。

あたしなんかとは。

（こんなのって、あたしなんかと違うってんじゃないきゃ、おかしいじゃない...）

裁きに因る死亡者

なし

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

2 1 人

8月9日

「一致団結」とかけ「鋳物の槍先」と解く
その心は「同質で硬く鋭くスゴクもろい」

「美結」

「？」

呼ばれて目が覚めた。

「え？」

私の横にいたのは健ちゃん。

「あ、あの、どう、したの…」

慌てて飛び起きる。

「これ、美結に来てたぞ」

健ちゃんは、折った紙みたいなのを私に見せた。

「え？なに、これ？」

「いや、俺だって分からねえけど、あて名が美結だったから」

健ちゃんは、そう言って持っていた紙を私の手の平の上に置いた。

「……」

折った紙には、『ミユさんへ』と定規を使って書いたみたいなまっすぐな線だけの字で書いてある。

うちのクラスで、『ミユ』は私一人だから、こう書いてあれば私あてなのは間違いない。

「健ちゃん、ヒデくんは？」

「英基は、他にも同じようなのがないか探してる」

「え？」

「これは、さっき廊下に出ようとしたら、ほら、廊下出るところにもドアがあるだろ？」

「うん」

「そっちのドアの、下の隙間から入れたみたいに落ちてたんだ」

「え？」

「英基に見せたら、他にもあるかもしれないって」

「そうなの…」

折った紙にまた目を落とす。

「これ開けていいのかな」

「美結あてなんだから、当たり前だろ」

「うん、でも、ヒデくん来るまで待ってた方が」

「そんな紙、危なくなんてないだろ」

「うん、まあ」

自分が注意深いなんて思ったことない。

でも、何となく言ってしまったら、健ちゃんに笑われてしまった。

「そうだね」

ゆっくりと折り目を開く。

「...」

「どうしたんだ，美結」

「...」

「美結」

「あ，ゴメン」

押し寄せたハテナで頭がいっぱいになってボーツとしてしまったみたいで，健ちゃんの声でハッとした。

「何を書いてあるんだ？」

「え，うん」

紙を健ちゃんに渡す。

「俺が読んでいいのか？」

「うん」

「分かった」

「うん」

健ちゃんが紙を見ている間，紙の裏を見てた。

（あ...）

そして気付いた。

この紙は美愛が持ってたメモ帳の紙だ。

私は別に好きでも嫌いでもないけど，ちょっと変わったキモカワのキャラクターを美愛はスゴク気に入ってて，見つけた物は大抵買ってた。

このメモも何回か見たことがあるから，同じのを持ってる人がいないとは限らないけど，たぶん美愛のだろう。

（美愛が？）

メモは美愛のだろうけど，書いたのも美愛なのかな...

「これって，あれだろ？下の紙に付いた字の跡を見えるようにするために真っ黒にするっていう」

「うん...」

「何て書いてあるかは判るけど，中身は訳分かんないな」

「うん...」

メモはエンピツを寝せて塗りつぶして浮かび上がった字の跡を赤いペンでなぞってハッキリさせた言葉が並んでた。

しかも，最初に『美結へ』って書いてあった。

メモが美愛のだって気付いてから思い出したけど、私のことを『美結』と呼ぶのは3人しかない。

健ちゃん、ヒデくん、美愛の3人だけだ。

あとの人達は『安齊』。

あ、栞那ちゃんも私を名前で呼ぶけど、呼び捨てではない。

ってことは、やっぱり書いたのも美愛だったって考えるのが当たり前なんだろう。

あの後すぐヒデくんが帰ってきて、他に同じような紙とかは落ちてなかったってことだったし、少し早いけど朝ご飯を食べようってことになったので、健ちゃんとヒデくんと一緒に廊下に出た。

「ゴメン、私ちょっと行っていていい？」

トイレの前で立ち止まる。

「ああ、でも気を付けろよ」

「うん、分かってるよ、ヒデくん」

トイレに入って、全部のドアが開いてたから誰もいないんだろうとは思ってたけど、一応全部の仕切りを覗いてから一番ドアに近い所に入った。

そうすることが『気を付ける』ってことだってヒデくんに言われてるから。

「...」

内ドアを閉めて、バッグから、そっと美愛のメモを出す。

メモに目を落とす。

美結へ

2 1 0 4

かなり乱暴力

8 3 0 0

シー・ソーなら見ると何？

トホウにくれる。

全然分からない。

鉛筆で塗りつぶした中に赤抜きだから、まず、字そのものが美愛の字か、よく分からない。

(大体にして、美愛、これで私に何を知って欲しかったの...)

美愛の考えてたことが分からない。

私は、まあ、スゴく頭がいいってわけじゃないから、このメモから分かることは何もない。

それは、美愛だって分かってたはずで、このメモの意味を私に分かって欲しかったわけじゃな

いだろな...

じゃあ、ヒデくんだったら分かるかっていうと、それも違った。

ヒデくんも、やっぱり分からなかった。

結局、このメモを私に渡そうと考えて、実行した人って、誰？

同じ部屋の人なら、ドアの下から入れて渡そうとするなんて回りくどいことはしないだろうから、同じ部屋じゃない人かも...

朝の集会は、村井くんが決めた法律を確認するだけで終わった。

『告発は法の違反があってから10分以内にすること』

ってというのが、その法律。

スゴク大事な法律だ。

どうして今まで誰も作ってくれなかったんだろう...

昨日の長谷田くんのもそうだ。

『法の適用は遡及しない』

この二つが、もっと早くから決まっていたら、いろんな人は助かってたかもしれない。

いや、きっと助かってたはずだ。

何となく、こんなことになってからできたグループみたいなのがあるのを感じる。

あたしは、いつも理璃と一緒にいた。

でも、ただそれだけで、あたしは理璃を助けられなかった。

今からでも、どこかのグループみたいなのに入った方がいいんだろうか？

同じ部屋で過ごしてる舟山さんとか一ノ木さんとか。

仲良くするのは違っててもいいけど、できる限り協力し合わないといけないと思う。

でも、そんな都合が良くできるのかな。

あたしは要領がいい生き方をしてこなかったから。

朝の集会が終わって見てみたら、いつもはサッと出て行っちゃう葉那ちゃんが座ってた。

(いいチャンスなんだろうな...)

「健ちゃん」

「ん？」

「まだもう少しここにいる？」

「んー...」

健ちゃんはチラッとヒデくんを見る。

「別に行くところもないから、しばらくはいるぞ」

ヒデくんが言ったので

「じゃ、俺も」

健ちゃんが私にうなずいた。

「うん」

「美結、廊下には出るなよ」

「うん」

葉那ちゃんの横まで歩いて行ってから、その場で大きく息を吸って

（よし！）

声を掛ける。

「あ、あの、葉那ちゃん」

「……」

ゆっくりと長いまつ毛の下の青い瞳がこっちを向く。

「なに？」

「あ、うん」

葉那ちゃんの視線が真っ直ぐ突き刺さってきたから

「っと、あの、うん、その」

しどろもどろになってしまっ、「何でもない」とか言って逃げちやいたくなるのを必死でガマンする。

やっぱり葉那ちゃんと気軽に話せないのは全然変わらない。

「ちょっと訊きたいことが…」

「私と？」

「うん」

「廊下の方がいいのでは？」

スーッと立ち上がる葉那ちゃん。

「っと…」

辺りを見回すと、もう大体の人は出て行ってしまってるようだった。

「すぐだから、ここでいいよ」

「そう」

「うん」

ヒデくん止められてるのもあるから、廊下には行けない。

「訊きたいことというのは？」

立ったまま、また座ることはしない葉那ちゃん。

「あ、うん」

（さっきちゃんと決心したんだから、聞かなきゃ）

「美愛の書き置きを届けてくれたのは、葉那ちゃんなの…かな？」

「書き置き？」

いつもと同じで表情は全然変わらない。

でも、聞き返してきたくらいだから、美愛のメモ紙を入れてくれたのが栞那ちゃんじゃないのは分かった。

「柚島さんが何か書き残していた？」

「え、うん」

「...」

口に左手の甲を当てて何か考え始めた感じの栞那ちゃん。

前もそうだったけど、栞奈ちゃんのこれは、何か考え込むときの癖なのかもしれない。

「……ったか……とく……か...」

「え？」

唇をふさいだまま何かつぶやいたので、栞那ちゃんは何を言ったのか全然分からなかった。

「...」

チラッと栞那ちゃんを見上げるようにする。

「ん」

栞那ちゃんは当ててた手を口から離して、私を見返した。

「今も持っている？」

「メモを？」

栞那ちゃんが無言でうなずく。

「ゴメン、今持ってないの」

首を振る。

「そう」

やっぱり全然栞那ちゃんの表情は変わらない。

「あ、でも、バッグの中に入ってるのを、すぐ持ってくるから待ってて」

そう言った私の顔の前で

「...」

栞那ちゃんは左手を広げた。

「え？」

「あとでいい」

「あと？」

「次の集会のときに、集会室で私が落とすノートに挟んで」

「え？」

栞奈ちゃんの手が私の顔の前から引っ込められたとき、もう栞奈ちゃんは私の方を向いてなかった。

そして、机の上のバッグを肩に掛けて行ってしまった。

「あ、あの...」

もちろん、私の言葉が聞こえたのかどうかはともかく、栞那ちゃんは立ち止まったりなんてしない。

お昼ご飯の前まで、同じ部屋の人達と一緒に建物の外に出た。

昨日は暑かったけど、今日は少しだけ涼しい感じだ。

夏ってことには変わらないけど。

ご飯を食べてから、部屋に戻って静かにしてたら、眠くなってきた。

おとといは全然寝れてないけど、昨日はほとんど寝れなくて、明け方ちょっと前にウトウトしただけ。

そんな私が眠そうなのに気付いた健ちゃんが、「寝てろ」って言ってくれたから、お昼寝をした。

何の夢も見なかったの、まあまあふつうに起きれて、時間はもう4時近くだったのでビックリした。

夕ご飯食べてから集会室に来てみると、何人かもう来てた。

来てた人の中には栞那ちゃんもいて、いつもの席に座ってる。

私達も、いつもの席に座る。

何分かしてから、栞那ちゃんからすれば窓の方、私達の方に向かって歩いてきた。

何か私に用なのかと思ったけど、栞那ちゃんが全く私の方を見ていない感じだったので、私に用があるわけじゃないようだ。

「！」

そして、私の座ってる席の横を通り抜けようとした栞奈ちゃんから、わきに挟まれてた物が滑り落ちた。

ノートと紙が結構ハデな感じで床に広がった。

「あ、大丈夫？」

床に散らばった3冊のノートと、いっぱい紙。

栞奈ちゃんが拾い始めるのを見て、私も自分の近くまで散らばったのから拾い始める。

「紙はノートに挟んでくれればいい」

「え？」

私に向けられた青い瞳からのまっすぐな視線で、瞬間的に、さっきの栞奈ちゃんの言葉の意味が分かった。

(落とすノートに挟んで...か)

散らばった紙を拾い集めながら、用意してた美愛のメモをノートに挟む。

「はい」

拾い集めた紙とかをノートに挟んで、栞奈ちゃんに差し出す。

「ありがとう」

「ううん」

(これで、栞奈ちゃんに美愛のメモを渡せた)

もちろん、栞奈ちゃんにだってメモの意味なんて分からないかもしれない。

ヒデくんにも分からなかったんだから。

7時になったけど、空いてるところは10コ。

10コっていうのは、朝より1コ多いから、7時まで来てねえ奴が1人いるってことだ。

しかもそいつは、今この時間にいないんだから、ここまでよくあったように、たぶん助からねえんだろう...

(それにしても)

双子になんて生まれるもんじゃねえなと思う。

確か、今いる方が妹で、ここに来てない方が姉だったか。

まあ、オレには関係ないことだが、あんな自分が死んだみたいになっちまうんだから、鈴木達は過ごした時間の重なりがふつうの姉妹なんかとは違うんだろうな。

二人一緒にやっちまうのは、大体にして難しいのかもだが、バラバラにやるのは人でなしなやり方だ。

段々なりふり構わねえやり方になってきてるんだろう。

それに、なりふり構わねえのは、あの二人もだ。

長谷田と中岡。

「みんな端末には触らないでくれ」なんて言って、おそらく鈴木が時間に間に合わなかったことを告発させないようにしようとしてる。

告発に制限時間を作ったから、その時間を告発させなければ違反したってチャラになる。

おととい大量に死んだとき、時間に部屋にいないでアウトだったのは柚島だけだが、それに懲りたのかもな。

(悪い考えじゃねえけど)

オレなら、もっと反感を買わねえようにする。

あの二人は結局ここ止まりのヤツらってことかな。

「鈴木さん...」

7時10分を過ぎ、姉の方の鈴木さんを探しに行く人達が出て行った。

「...」

取りあえず誰の告発も封じたまま、助けられるようにしていく。

これが今までで一番正しかった気がする。

ただ、一日の善し悪しとしては、もちろん今日も最低。

ここに連れてこられて良かった例しがないけど.....

「無事だといいよね」

ちょっと右後ろの辺りにいた安齊さん。

「そうだね」

安齊さんに答える。

「部屋にいないってのがスゴクイヤ」

「え？」

「スゴクイヤだな」

「安齊さん...」

安齊さんの心配というか、気持ちというか、わたしとは違うところに心を痛めているのが判った。

初日から、時間に部屋にいなかった人は死んでしまってきた。

そういう人達のことを思い出すこともなくはないだろうけど、きっと柚島さんのことを考えているんだろう。

別に、責任感が強いと自分で思ってるわけじゃない。

わたしにもっと強い責任感があつたら、安齊さんに話し掛けられる。

別に、正しいことできてるわけじゃなくて、逆に正しくないことしてるのも解ってる。

わたしにもっと強い意志があつたら、安齊さんに話し掛ける資格があつたのかもしれない。

(わたしには何もできない...)

安齊さんが廊下に向かって歩いて行く。

その後ろを鹿生くんが続いた。

仁藤くんは、さっきすぐ出て行つたから、たぶん鈴木さんを探しに行つた。

鹿生くんは、安齊さんを守るために残つたんだろう。

(別にわたしなんかいたって...)

そんなことを考えながら、フツと安齊さんの行く先を見ていたら、廊下の窓から外を見てる榮川さんのところへ行つた。

前々から、安齊さんと榮川さんが話してるのには気付いてた。

何を話してるのかも気になってた。

でも、いつも一瞬気後れがして近くに寄れないでいた。

(今日は、ちゃんと)

真っ直ぐ二人に向かって歩いた。

「希望を持つのがダメなことなの？」

「いや」

安齊さんのすぐ後ろに付いた時、そんな会話が聞こえてきた。

「希望自体ではなくて、関わる人次第ということ」

「どういうこと？」

安齊さんが榮川さんに訊くと、榮川さんは何故かわたしをチラッと見て

「人を救う役に立つけれど、逆に滅ぼす原因にもなる」

と答えた。

「え？」

「...」

訳が分からなそうな顔をして自分を見上げた安齊さんから榮川さんは視線を思い切り外した。

そして、安齊さんの横を通り抜けるところで、榮川さんがボソッとつぶやいた。

「麻薬に頼らないで」

「なに？」

たぶん榮川さんは、わたしや安齊さんに向かって言ったんだろうけど、少し離れた所にいた鹿生くんにも聞こえてたようだ。

「おい、榮川、どういう意味だ、それ」

鹿生くんは榮川さんを呼び止めようとしてるみたいだけど、やっぱり榮川さんは立ち止まる人じゃない。

「おい！」

そのまま行ってしまった。

「何なんだ、あいつ」

胸の前で左の手の平を右グーで叩く鹿生くん。

「...」

鹿生くんは分からなかったみたいだ。

安齊さんもポカンとした感じにいるから、たぶん分からなかったんだろう。

でも、いつも人より理解が早いとは言えないようなわたしだけど、さっき榮川さんが言ったことのホントの意味は、なぜかすぐ分かった。

希望自体がどうこうってわけじゃないけど、関わる人次第で希望は人を救い人を滅ぼす。

ここでの毎日、ここでの時間には絶望ばかりが満ち溢れてる。

周りに絶望しかなければ、希望が欲しくなる。

一度でも希望で気を紛らわしたことがあれば、絶望で潰されないため、もっと大きな希望を欲しがる。

それでも絶望が押し寄せてきたら、もっとずっと大きな希望を欲しがる。

だって、希望に浸ってれば、絶望なんてなくなったような気になれるから。

それでも、ふとした瞬間、また絶望が見えてしまったら？

もっとずっとスゴく大きな希望を探す？

(キリがないよ...)

絶望の前で目をつぶって、絶望を見えなくしても、まぶたの外には絶望がやっぱりある。
絶望に背中を向けて、絶望が目に入らなくしても、自分の後ろには絶望がやっぱりある。
絶望がこの世界からなくなった気でいたとしても、押し寄せてきた絶望に潰されるだけ。

(でも...)

わたしは、とっくにそうだった。

遠くないいつか絶望に食い殺されると解ってるからこそ、『麻薬』に頼ってる。

もう、『麻薬』と寄り添ってなきゃ生きていけない……

裁きに因る死亡者

鈴木まな恵

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

20人

8月10日

本当に大事なものは目で見れない
いつ失くしたのか知ることもない

目覚めが良かった例しがない。

今日だって、もう忘れちゃったけど、やっぱり何か悪い夢を見てたはずだ。

当然だけど、やっぱり鈴木は死んだんだろうから、これで丁度10人死んだことになる。

(じゃあ...)

鈴木は何で死んだんだろう。

中岡が見付けたとか言ってた機能を使って、端末で調べてみる。

思わず笑いそうになる。

だって、作っておきながら、千賀が自分で引っかかった法だった。

まったく、バカとしか言いようがない。

ここでの生活に絶対必要な物なんてない。

完全に自由じゃないけど、一応食べ物とか服には困らない。

だから、鈴木だって、千賀だって、別に盗んだりしたんじゃないだろう。

ってことは、誰かの物を自分の物だと思ったかなんかだ。

おれには絶対起こらないことだ。

だって、自分の物と、そうじゃない物なんて分かるだろう、ふつう。

どんな勘違いをしたって、おれには、そんなことない。

それに、自分で作った法に自分が引っかかるなんて、そっちもあり得ない。

法を作るなら、自分の役に立つか、何があっても自分は引っかからないようなものだ。

それか、他の誰かより有利になるか、誰かを引っかけられるものだ。

そうなるようにしなくちゃいけないし、そういう法じゃないんだったら作っちゃいけないんだからな。

起きてる間、いやいや、寝てる間だって、ずっと絶対気を抜けないなんてまっぴらだと思ふ奴はいるだろう。

というか、みんなそのはずだ。

だから、お互い見張り合うため、寄りかかり合うため、何人かで集まる。

おれも誰かといるとき、気を抜いたふりをしたりする。

その方が目立たないし、他の奴が気を抜く。

だけど、気を抜いたりするのは最後の一人になってからでいい。

しかも、最後の独りなるのが、あと3週間後ってわけでもない。

おれ以外が全員いなくなれば、今日にでもあり得ることだ。

おれから仕掛けるってのは、危険だし、そんなことしないのがいい。

誰か気の短い奴がやってくれないだろうか？

どうしてだろう？

何を考えて？

不思議でしかない。

考えたって俺には解らない。

想像しようとしても、何も思い浮かばない。

ただ、感じるのは、俺がいつも正しい判断ができるわけじゃなくても、あんな奴よりは正しい判断ができるはずだってこと。

それなのに、あいつはあんな奴と一緒にいることが急に増えた。

(……)

そういえば、大翔は「言わないことが伝わるわけない」と言ってたっけ。

確かに大翔の言うのが正しいかもしれない。

でも、だからって、あいつに言うわけにはいかない。

大体、何から先に言っていっても判らない。

結局、どう言っていいいのかだって判りやしない。

それに、今日は何日だと思ってるんだ？

10日...

最初の日から、ずっと同じことを考えてきたが、おとといくらいからは余計考えなくちゃいけなくなった。

10日で10人死んだ。

このスゴく下らない状況に乗って他人を追い落とそうとしてる奴がいる。

そいつにすれば、いいペースなんだろうか。

それとも遅すぎるんだろうか。

まあ、そんな奴が何をどう考えているか考えても仕方ない。

俺はあいつを守りたい。

俺だって、俺が自分の身を守るのだって難しいだろうことは解っている。

あいつがもし誰かに自分を守って欲しいと思っけていても、その誰かが俺とは限らないし、まあ、俺であるはずないというのも解っている。

でも、もし、守ろうと思っけていることを伝えられれば...

でも、もし、誰に守って欲しいのか訊ければ...

(言わないことは伝わらない...か)

口に手を当てて溜息をする。

ゆっくりと、ホントにゆっくり周りを見る。

夜の集会が終わったので、集会室を出て行く人もいるし、残って話をしてる人もいる。

変に見られないように注意して、集会室の床を見渡す。

やっぱり、ないみたいだ。

集会室を出る。

ゆっくりと、ホントにゆっくり全身を触る。

ホントにないかどうか、もう一回探る。

それでも、ない。

バッグの中を引っかき回しながら、来る途中の廊下を、ちり一つ見逃さないようにして歩く。

どうしてないんだろう？

安齊さんが言ってたことは、スゴく良く分かったつもりだった。

いつのまにか、自分の物じゃない物が入れられないように気を付ける。

そのために、ずっと肌身離さず荷物を管理する。

(あ、でも...)

もし、「これは誰の？」なんて訊かれたら、どう答えればいいんだろうっ、て聞いておけば良かった。

だって、自分以外の物を持ってたとかいうことになって、理璃も死んでしまった。

だから、あたしだって、いつ訊かれるか分からない。

でも、今気にしなきゃいけないのは、そんなことじゃない。

早く見付けないと。

ほんの少し前のあたしだったら、のん気に聞いて回ってただろう。

今は、聞けない。

きっと、安齊さんなら、聞いても大丈夫だと思うけど、一緒に探してもらうわけにもいかない。

とにかく、あたし一人で、どうにかして見付けないと。

(それにしても...)

増えることばかり気にしてたら、減ったのは気付かないんだろうか？

今日は村井くんが王様だった。

朝起きた頃には、まだ法を作ったっていうメールが来ていなかったけど、ご飯食べ終わってから端末を見たら来てた。

法の違反を告発された者は他の者を告発できない。

ちょっと後ろ向きな感じはするけど、連鎖的っていうか、みんな次々と破滅していかないようにはすることができる。

もちろん、普通の感覚だったら、みんな破滅するようになってしないだろう、自分も含めて破滅するなんてことは。

普通だったら...

でも、わたしも、もう自分が普通でいれてるなんて思っていない。

あんなことを選ぶんだから、普通なんかじゃ、もうない...

(.....)

普通じゃないって言えば、鈴木さんはホント普通じゃなかった。

当たり前だ。

双子なんだから、ほとんどの時間一緒に過ごしてきたんだろうし、どっちかがいないなんてこともなかったと思う。

ずっと同じ部屋だったから、わたしも二人の様子を見てた。

顔もほとんど同じだし、合わせ鏡みたいな感じで頑張ってた。

それなのに、昨日突然、ホントに突然終わってしまった。

わたしに想像しようもない絶望。

鈴木さんがおかしくなってしまうのも当たり前だ。

精気が抜けてしまったっていう表現が正しいのかどうか分からないけど、何も見えない何も聞こえないんじゃないかな？と思ってしまうくらいの様子。

実際、時間になったので集会室に行こうと声を掛けても、全然反応がなかった。

でも、まさか、部屋に置き去りになんてできないので、集会室の行き帰りに手を引いてあげた。

鈴木さんからは何の反応もなかったけど、ここに来て一番正しいと感じた行動だった。

せめてご飯くらい自分でできるようになってくれれば、いいんだけど...

もちろん、別に鈴木さんのことが面倒だとか、そんなんじゃない。

(そんなんじゃない、はず.....)

いつもの部屋に着いてしまった。

結局集会室にも廊下にもなかった。

じゃあ、この部屋なの？

部屋には、舟山さんと一ノ木さんの二人だけがいた。

あたしを見た一ノ木さんが、こっちに来る。

「...ちょっと」

あたしの横に来たところで、小さな声を出した一ノ木さんが部屋を出て行く。

「？」

何だか分からないけど、付いてきてってことなんだろうから、あたしも廊下に引き返す。

一ノ木さんは、廊下の突き当たりで左の部屋に入る。

「え？」

あたしでも、知ってる。

柚島さんが閉じ込められてた部屋。

何の用があるんだろう？

でも、今さら一ノ木さんの後につかないわけにもいかない。

あたしも入ろうとすると、一ノ木さんは、ホントに戸口のところに立って全然中にいなかった
ので、ぶつかりそうになってしまった。

「あ、ゴメン」

「...これ」

一ノ木さんは、あたしに何かを押し付けると

「...」

横をすり抜けて、走って出て行ってしまった。

(何，これ？)

見ると、探してた物だった。

どこかに落としてたんだろうか。

部屋に置き忘れてたんだろうか。

一ノ木さんが見付けてくれて、そっと渡してくれた。

(良かった...)

安心したら、思い出した。

いつだったっけ？

あたしは一つ決断した。

あたしがここで危ない目に遭ったりしなかったのは、あたし以外のみんながあたしを守ってく
れてたからだ。

理璃もその中の一人だったのに、あたしは理璃の役に立つため何もできなかった。

あたしも誰かの役に立ちたい。

そんな気持ちだけあって、実際には何もできないできた。

でも、本当は結局、あたしを頼りにしてくれる人なんていなかったのかもしれない。

分かってたはずだった。

みんながみんな助け合おうとしてるわけじゃない。

誰かを蹴落とそうとしてる人がいて、実は自分一人を守ろうとするのだってできるかどうか
って。

あたしの決断が、今まで自分を守るためにそれが役立ってきたような気がしてた。

(え...)

急に背中と腰の辺りがゾゾゾオーツとする。

あたしにこれを渡して、走って行ってしまった一ノ木さんの背中...

なんか、頭の中がグルグルグルグルしてきた。

何かが、つながりかけてる。

でも何だか全然分からない。

希望に関わる何か、かもしれない。

絶望に関わる何か、かもしれない。

役に立たない何か、かもしれない。

ちょっと別なことを思い出す。

そういえば...

(良かった?)

あたしが、自分の気持ちを伝えた、あそこに...

一ノ木さんがいなかったっけ?

つながってきてる...

一人で探そうとか思う前に、一人になっちゃいけなかった。

あたしに何ができたってわけじゃないんだけど、理璃と一緒にいれるように、がむしやらに何かしなきゃいけなかった。

一人で決めちゃいけなかった。

思い上がってたんだろうか。

あたしなんかに声を掛けるくらいだから、理璃はとっくに聞いてただろう。

「理璃は、どうするの?」

聞いておけば良かった。

聞いてみたかった。

そっかあ...

あたしのやることなんだから、やっぱり正しい決断なんかじゃなかったんだ。

床の上の右手を見た途端、急に頭の中がチカチカチカチカし始めた。

つながった...

何だか分かった...

希望に関わる何か、じゃなかった...

絶望に関わる何か、じゃなかった...

役に立たない何か、じゃなかった...

あたしには?

あたしだけ?

明日が来...

ない.....

裁きに因る死亡者

曾根嶋茉莉亜

裁きに因らない死亡者

なし

国家の人口

19人